227-048ウ
1200500730937

始

227
0.48

回教海事史

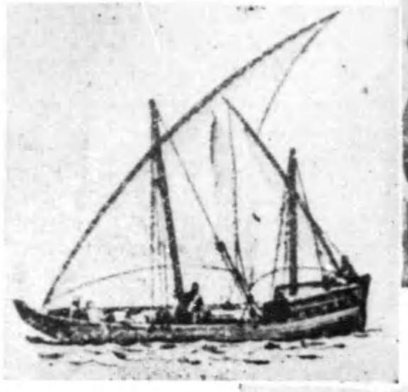
岡島誠太郎

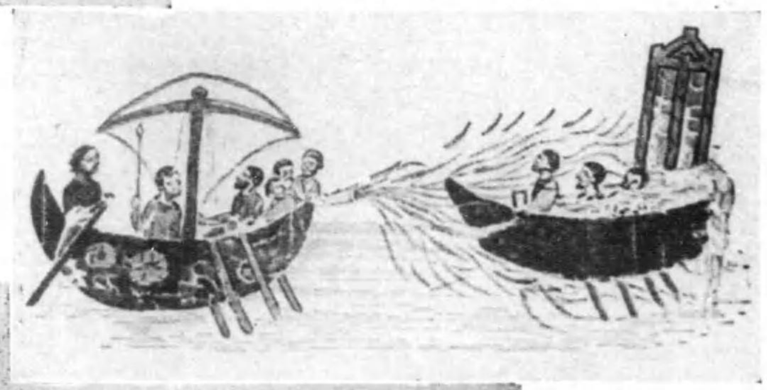
昭和九年三月十日 寄贈

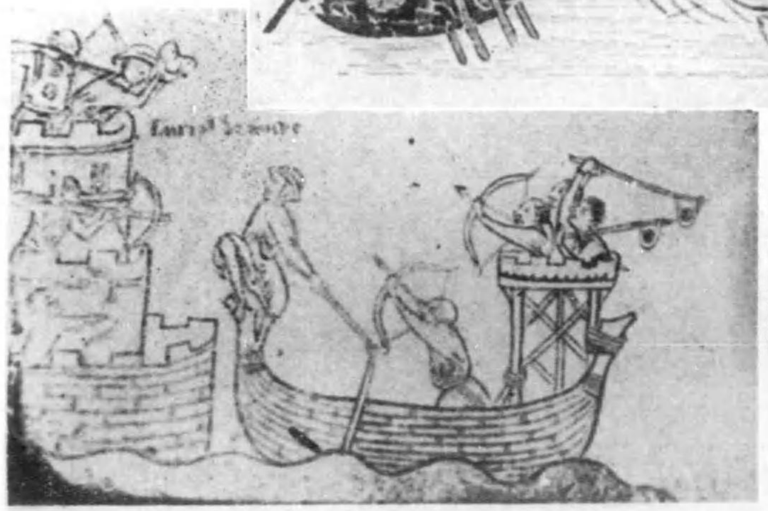
アラビヤ商船

ルブーノィテンタスンコ
火のヤシリギ、船防攻

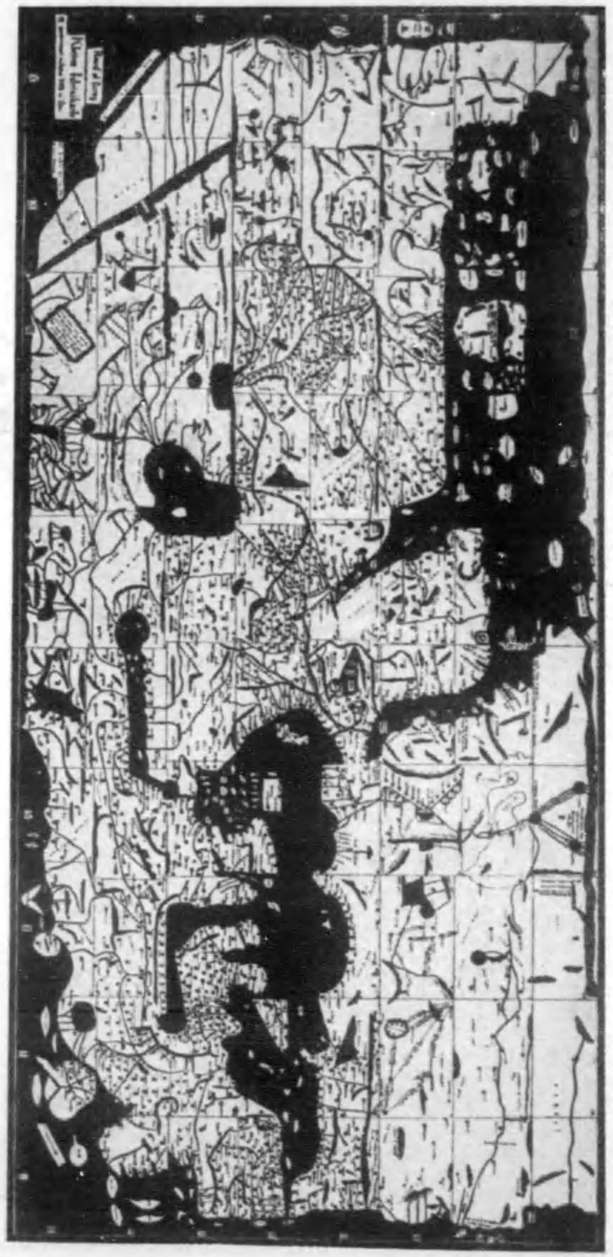
「ウダ」船しせ海航洋遠の人ヤビラア



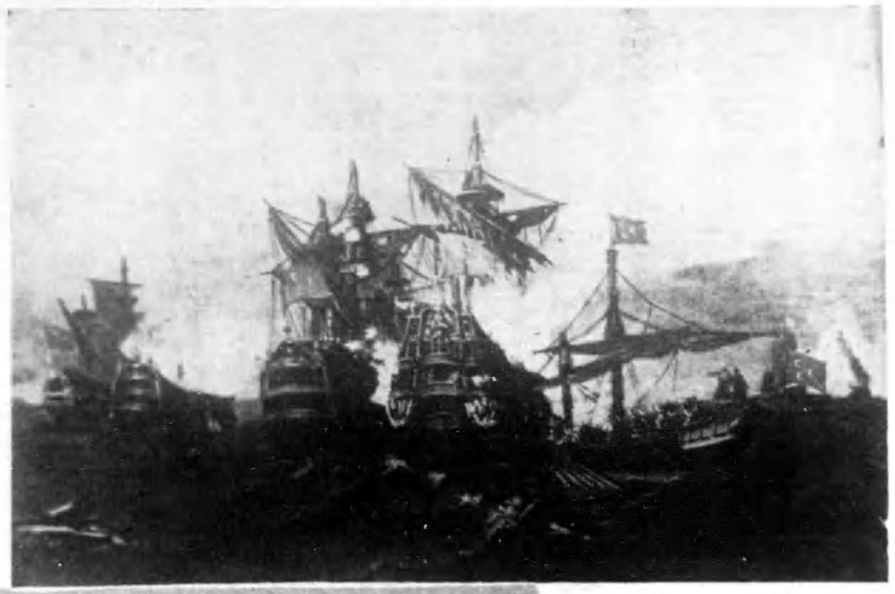




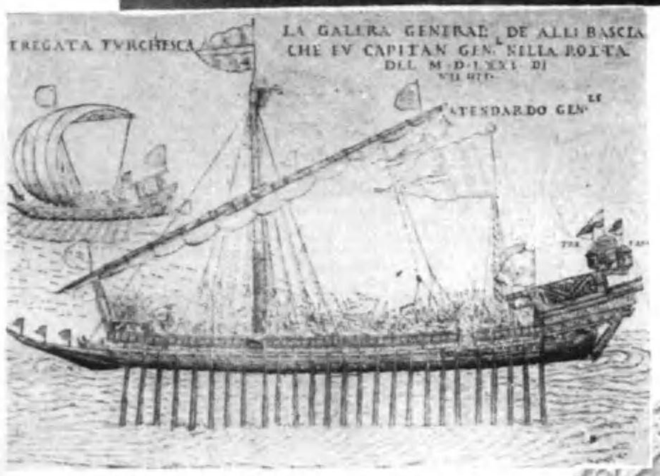
ダミエッタ攻撃戦



(後公年二九一一) 圖地界世小のーシリドイ



レヴァンテの海戰



十二世紀のトルコの軍艦

陸をルブーノィテンタスンコ
世二トツメフメためしせ落

966
287

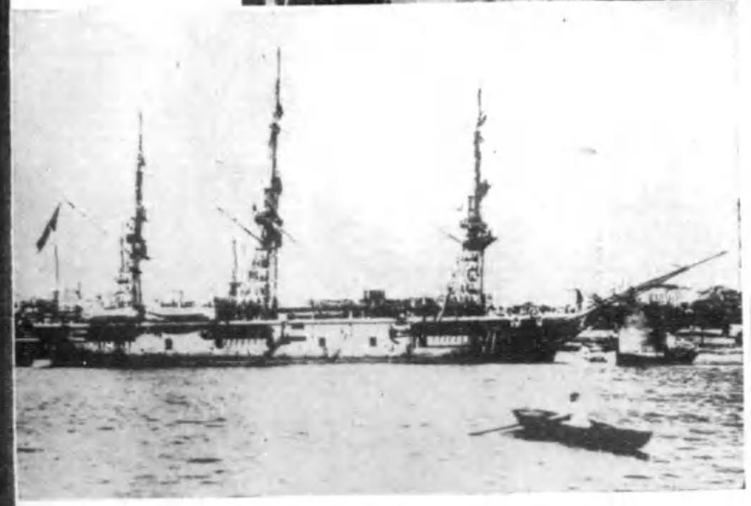
序

西南太平洋における苛烈なる死闘は一億國民に結びつけられてゐる。このために銃後の奉公いよいよ強化すべき秋、曾て雄飛した回教徒の海上活動に關する一書を以て、貧しいものながら聊か報國の微衷を示したい。素より完全とは思はない。江湖の是正を仰いでやまない次第である。

本書のなるためには、天理時報社の上田理太郎君は事務繁忙の

樫野崎トルコ軍艦遭難記念碑

樫野崎トルコ軍艦遭難舊記念碑



遭難せしトルコ軍艦エルトグロール號

中を或は調査のために同行され、或は材料の整理に進んで當られた。深く謝意を表したい。

昭和十八年七月二十日

第三回海の記念日

岡島誠太郎

回教海事史目次

序
緒言……一
先史篇……一五
第一章　紅海より進出……一六
第二章　印度洋の活躍……三一
興隆篇……四一
第一章　概説……四二
第二章　回教海軍の建設……五一

第三章　コンスタンティノーブル攻防戰……五六
第四章　東部地中海の爭奪……六四
第五章　シチリア攻略戰……七三
第六章　西部地中海の制覇……八四
第七章　印度洋通商の殷盛……九六
第八章　支那回教勢力の樹立……一〇六
第九章　元と回教徒……一二四
隆替篇……一三七
第一章　ヴェニスと回教徒……一二八
第二章　ノルマンの南下……一三九
第三章　オスマン・トルコの盛衰……一四六
第四章　印度洋への新航路の發見……一五八

第五章　その後のトルコ……一六四
補遺篇……一七五
第一章　アラビア語と海事……一七六
第二章　七つの海……一八二
第三章　海の子アラビア人……一八八
第四章　土艦エルトグルルの悲運……一九一
第五章　楠葉入道西忍がことども……二〇五

緒言

I

大東亞新秩序の建設は　大御稜威の下、皇軍將兵の血と涙との活動によつて着々と進められつゝあるが、この建設戰において忘れることのできない一大事は「自己を知ると同時に相手を知る」ことである。こゝに相手を知るとは、共榮圈諸民族の歷史を知り、文化を知り、現狀を知り、而して彼等の歷史的運命の根本を明確に知ることである。卽ち、これは皮相な飜譯知識ではないのであつて、われわれの建設戰は、その性格において、米英依存の知識を受け入れないのである。

今日われわれが建設戰と呼ぶところのものは、東亞の諸民族を米英の桎梏より解放し、各民族の據つて立つところに生命を與へることである。嘗て、米英は領土を

奪ふばかりでなく、その歴史を奪ひ、文化を奪ひ、さながら吸血鬼の行爲を敢てなしたのである。しかも彼等にとつては、之が彼等一流の建設戰であつたのであるが、われわれの戰ふ大東亞戰爭は、炳乎として　皇道宣布の戰ひであるがゆゑに、建設の意義も亦これに隨ふものである。

吸血鬼の行爲は相手を殺すことである。殺さぬまでも生ける屍にすることである に對して、われわれの目ざす建設においては、相手をよりよく生かすことである。この根本的相違から、求められる知識にも亦自づから非常の隔たりがあつて然るべきである。

さりながら、共榮圏諸民族の歴史を語り文化を說く主要なる文獻は、殆ど米英人の手になつたものであつて、今日までのわれわれの南方知識と稱するものは、多分に之等の飜譯知識を流入してゐたのである。果して、これでよいのであらうか。

米英人の書いたものは、彼等の必要に應じて知らんとする範圍を書いたにすぎない。ゆゑに、無意識的に、意識的に省略してゐる處がある筈である。しかも、省略されてゐることの中に、われわれとしては確實に把握しなければならぬものがある。

かく考へれば、文獻的に米英依存の態度を捨てねばならぬことを痛感するのであるが、果して然らば、彼等のものを捨てゝ新しい材料があるか否かといふ問題に逢着する。こゝにおいて、われわれの道として殘されてゐることは、民族自體が持つてゐる文獻によつて新しい材料を探すことであり、更にまた米英人の著書においても、これを鵜呑みにせずに、彼等の言辭の裏にあるものを探査することである。これを建築に例をとつてみたい。

建築物を改造するといふことは、新しく發生した目的に應ずるやうに解體して建てなほすことである。この場合、元の材料だけでは十分な仕事は出來ない。第一に「基礎工事も改めねばならぬし、主柱の取り換へも必要であらう。その他、細々しいところに幾多の新材料も要求されるであらう。卽ち、古い材料を適所に生かしつゝ、多くの新しい材料を加へて改造の目的を達するのである。

從つて、米英人の著書を古い材料となし、こゝにわれわれの手による新しい材料

を得て初めて、われわれの目的が達せられるのではなからうか。

されば、ともかくも新しい材料を求めなければならぬ。このためには、無駄な努力を拂ふやうな場合もあるだらうが、之はやむを得ない。

II

近來、回教(イスラーム)及び回教(イスラーム)文化の研究に關する著述を多く見受けるに到つたことは洵に慶すべきことではあるが、概ねヨーロッパ學者の說くところを一應紹介するといふ程度に止つてゐるのが多いやうである。尤も、我が國に回教に關する知識の入つたのは、極めて近年のことであるがゆゑに、かゝる狀態にあるも已むを得ない次第ではあるが、しかし、この種の著述も一般に普及されてゐるとは云ひ難い程の狀態にある。

既に述べたる如く、回教及び回教文化に關する彼等の著述は、彼等の世界觀によつて書かれたものであり、又、彼等の交渉の範圍において必要とする部面を描いたのであつて、われわれの世界觀によるときは、幾多の誤りを指摘し得るのである。

元來、回教はアジアに起つた宗教であつて、地理的因緣より之を觀れば、歐米よりも寧ろアジアに深い交渉があり、從つてわれわれの關心も大なるべき筈である。

さりながら、歷史の過程において、回教圈は西方に驚くべき伸展をなした。一時はコンスタンティノーブルを危殆に瀕せしめ、北アフリカ沿岸を席卷してイベリヤ半島を攻略し、ピレネーを越えてフランスに侵入したのである。卽ち、西歐人と回教徒とはかゝる侵寇者と被侵寇者との關係にあつて、西歐人には、たとへ一時といへども、その脅威の下に置かれた事實に對して、忘れることのできぬ恨みがある。

この點において、回教とアジアとは深刻な交渉を持たぬやうに考へられもするがそれは皮相の見解にすぎない。「ローマは一日にしてならず」と云はるゝ如く、回教徒のこの大遠征は決して一日にしてなつたのではない。教祖、ムハンマッド（一二三〇—一二九二）によつてアラビア族の民族的運動が展開したといふよりも、アラビア族の宿命的運命が教祖によつて呼び醒まされたのである。このことは、教祖出

現までの彼等のアジア海域における海事史を顧みるとき自明なるものがあり、われわれは、アラビア族はアジアに生育した民族であることを知らねばならない。姿においてのみ、彼等は西歐に伸びたのであつて、根脈においてはアジアに繫り、然も彼等をして、西歐侵寇をなさしめた民族的運命を養うたものは、やはりアジアであつたのである。

地理的に見ても、アジアの半ばは乾燥地帶であり、アラビア族を育てた自然環境と同一のものを持つてをるに對し、西歐は全くその趣きを異にしてゐる。されば、われわれのアラビア族に對する理解と、西歐人のそれとは自づから異るのが當然であつて、尙且、武力的壓迫を受けた西歐人に、われわれの承服し難き僻見のあるのは、蓋し至當となすべきであらう。

Ⅲ

西歐は明らかに回教文化の恩惠に浴してゐる。西歐の暗黑時代に文化再生の光明を投じたのは、サラセン文化ではなかつたか。然るに彼等は之を認むるに躊躇し、之を稱揚するを潔しとせない。他より奪つたものを傳へて居りながら、自家傳來の誇りの如く公言して憚るところがない。恰も戰國亂世の時代、武將の中には滅した敵の系譜を奪ひ取つて我が家の系譜となし、敵の祖先の功を我が祖の功名手柄に置き代へて誇らんとした態度と同一である。之は明らかに專横なる白人貴族主義の現れである。

なるほど、彼等の世界的活動によつて、全世界が歐米風の色彩に塗りつぶされた時代がある。この場合、彼は己を以て世界の覇者なりと自任し、その立場より世界を觀、而して彼の世界觀を以て最上唯一として之を他に强要したのである。所謂、白人貴族主義と稱するものは、こゝから起つてゐる。

彼等は世界制覇の威を以て「歐洲の世界」と稱へ、「世界の中心は歐洲なり」と豪語し、「歐洲の出來事は直ちに全世界に影響を與へるが、他の地域における出來事は單に歐洲の反映にすぎぬ」となし、されば「歐洲の歷史さへあれば餘他の歷史は

省みる必要はない」とまで考へた。

かゝる專横極る態度をもつて、彼等は自からの歴史を書いたのである。少くとも、彼等の世界觀にあつては、歐洲の歴史は、世界制覇の現狀において變ることがないと考へてゐた。己を以て世界の長となし、興亡變轉を擧げて他民族に押しつけてゐたのである。されば回教のことにしても自からが受けた恩惠は之をひた隠しにし、回教文化は自滅すべき理由を持つてゐたと、その缺點を擧げるに汲々たる態度を露呈してゐる。これは支那の正史に屢々現れてゐる通り、支那歴代の朝廷が、前王朝の覆滅すべき理由を擧げて歴史を書いた態度と酷似してゐる。

以上によつて明らかなる如く、少くとも現在の世界史なるものは、米英世界觀と稱する埃の堆積の下に埋れてゐるのである。

例へば、こゝに一基の佛像がある。しかし百數十年の埃をかむつてゐる。一見すれば何の價値もないものゝ如くである。それでも明かるい光の下に置けば、埃の底から微光がさしてゐるではないか。そこで埃を拂つてみると、これは素晴しい美術品であり、燦然たる光を放つたのである。――かういふ事は常にあり得ることである。

先づ埃を拂ふことが第一である。今日の歴史家に要求されるものは、この努力であると考へる。もとより之は容易の業ではない。といつて、このまゝにして放置すれば、何時までも米英的の埃を拂ふ譯にはまゐらぬ。敵性思想を一掃せよと云はれるが、歴史家の立場において、之が最も急を要する大事と考へるのである。

さりながら、之は一人の業を以てなし得るところではない。多くの力の結集に俟つの外はないのである。

Ⅲ

西歐人は云うた。

「歴史を形成する上に參加できない民族を考慮する要はない」と。

卽ち彼等は、世界制覇をなし得た時にかく豪語したのである。この言葉の裏には、

もとより、アラビア族もなければ、回教文化もない。彼等は既に默殺してゐたのである。さりながら、大東亞新秩序の建設が着々と押し進められる今日においても、尙且かく云ひ得るであらうか。

嘗て英國は自國の繁榮を稱へて、

「太陽の沒することなき國」と云ひ、

「七ツの海にユニオン・ヂヤックは飜る」

と云つた。單に自國を呼ぶにかく云つたのではなく、彼は他國民にもかく稱へしめ、以て英國を世界の王座に昇ぎあげしめたのである。

彼のこの言辭を以てすれば、如何にも英國は古へよりかくあつたかの如く聞えるが、事實は決してさうではない。英國が海上にその姿を現すに至つたのは漸く十七世紀以後のことである。

彼は「海上に私有權はない」といつて、盛んに海賊的行爲を行ひ、政府も之を援助した。而してエリザベス朝（一五五八―一六〇三）の時代には、イスパニアの通商貿易を抑へるために、「私設拿捕船」を認め、かくして次第に力を得、やがて海軍力の增强によつて海上の敵を一掃し、彼の海上勢力は確定的のものとなつたのである。

然るに、彼はこの事實を以て、初めから海の王者であつた如く公言した。彼の前に何人が海の王者であつたかについては一言も觸れず、己の現實のみを世界に賣り付けたのである。彼は唯、如何にも美しく勇ましい言辭を巧みに使うたにすぎない。

しかも、こゝに彼の謀略があつたのである。

回教の教祖ムハンマッドは

「神は吾々に與へるに乏しい。沙漠の上に與へられたものは之を取りて用ゐよ」

と云つた。これに對して、英國は「海上に私有權はない」と云つたのである。かくて、回教徒の海上活動を封鎖して彼を沙漠に押しこめ、海軍力にものを云はせて海上といふ海上を制壓したのである。こゝに到つて、われわれの感ずることは、兩者の言辭の巧拙のみである。

海の王座に君臨したものは、決して英國のみではない。英國の前にスペインがあり、ポルトガルがある。而してその前に、我が日本があり、アラビア族がある。

V

要するに問題は、回教史の研究に當つては、西歐人の說くところから離れて、之を冷靜に見直すことである。

初めにも述べた如く、大東亞戰爭の戰爭目的が、皇道宣布である以上、共榮圈の民族の共存共榮のために、回教徒の歷史と文化とを、われわれは公正な目を以て觀なければならぬ。

さりながら回教徒の海上活動は現狀において見ることが不可能である。歷史研究の一つの道として、結果から原因を推す——即ち、現實から出發してその過去を探り由來を尋ねるのである。この場合において誤りやすいことは、現狀に見當らぬものに對しては、全くその探求を行はないといふことである。ゆゑに現狀よりの類推も一應は大事ではあるが、逆に現實を離れて過去の事實に沒頭する必要がある。これは一概に古いものを好むといふ譯のものではないのであつて、過去に沒頭することによつて現狀に見當らない事實を明らかになし得らるゝのである。

こゝに述べんとする「回教海事史」も、この意を以て、過去の究明に從ふことゝした。それは、回教徒の現在の姿によつては、過去を窺ふ何の手がかりもないからである。

さて、過去において回教徒の海上活動が如何に盛んであつたにせよ、現在まで持續し得なかつたとすれば、そこには確かに衰亡すべき原因があつた筈である。之はもとより否めない。しかし、その原因のために、彼の力が永久に亡び去つてゐるとは斷定できない。

英國の極盛期に、果して何人が今日の衰亡を云ひ得たであらうか。アラビア族にも、今日の哀れな姿を考へることも出來ないやうな大いなる時代があつたのである。

私は、その姿を、こゝに描きたいと念願してゐる。

而して、海に先鞭をつけたのは英國人でもなく、スペイン、ポルトガル人でもなく、アラビア人によつて初めて海の扉が開かれた事情が明らかにされ、アラビア人をして興起せしめると共に、西歐人ばかりが海上に雄飛したのではないといふことが明らかに出來れば、本書を書き下した私にとつて、この上ない幸せである。

今私は、嘗ての歐洲旅行の途次、この目を以て見たアラビア人の航海の姿を思ひ出してゐる。それはまことに印象的な光景であつた。南歐の紺碧の空と水の間に、彼等は眞ッ赤な帆を揚げた「ダウ」と呼ばれる小さな船を巧みに操つてゐた。それは、觀方によれば海の敗殘者の姿と映るかも知れない。しかしその小船を以て大海を航する彼等の技と魂膽の中に、往昔の盛時を再現するであらうと思はれる或る力――傳統――を思はずにはゐられなかつたのである。

先史篇

第一章　紅海より進出

I

アラビアは古來より香料の國として名があつた。特に南方に於て香料に富んでゐたことは勿論それに相違ないが、「幸福なるアラビア」と、一層その名を謳はれたのは、印度との交易の結果、印度の珍しい物産を地中海方面に傳へ得たためであらう。而してアラビア人が印度と規則的の交通を行うたのは實に　神武天皇の頃まで遡り得るのである。

こゝに問題となるのは、印度とアラビアとの間に行はれた交通の經路であるが、出土品による考證と言語による考證とによつて、大體二つの道が考へられる。

その一つはペルシャ灣を經てペルシャとの間に交通が開け、これがやがて範圍を廣めて印度に達したと思はれるものである。

これは、バビロニヤの出土品中に認められる圓筒印（シリンダー）によつて、窺知し得るのである。卽ちこれには海と船とが刻されてゐるが、海波の樣や船の形から推定して、單にペルシャ灣内の航海を表現したものとは受け取れず、ペルシャ灣を出て印度洋に及んでゐた航海の圖と考へられるからである。

第二は、アラビア東南端のオーマンより直ちに印度に達する航路である。

これも同じく、オーマンの出土品の文樣によつて、印度との交通が窺はれる。

以上の二航路中、何れを主となすべきかは、今こゝに明らかに斷定することは許されないが、いづれにせよ、アラビヤを出帆した船は、インダスの河口に集つて、此處で各地よりの物資を交易したものと思はれる。而して、インダス河口の西北地區にメソポタミア系の言語が傳へられ、その東南地區にアラビア系の言語が傳へられてゐる點より考へれば、ペルシャ灣よりする船は河口の西北地域に止り、オーマンよりする船はその東南地域に略ゝ止つたといふことが窺知し得るのである。

第一圖　アラビア、印度及地中海沿岸圖

これが、オーマンからアラビアの東岸傳ひに迂回して航行したものであれば、ペルシャ灣の船と同樣に、河口の西北に止つてしまはねばならぬ道理であるが、東南に止つたといふ根據より觀て、この時代において、アラビア人は早くも季節風の利用による航海を心得てゐたと云へる。即ち、彼等は、ペルシャ灣經由の迂遠の航路をとらず、直ちにアラビア海を突ッ切つて印度に達したのである。

一度び、季節風の利用を知つたアラビア人は盛んに印度と交易することゝなり、その結果、南部アラビアに印度の物産が多くなつた。これに着目したのはフェニシア人である。彼はスエズ地峽の横斷の困難をも省みず、アラビア人との交易の道を開いた。當時、フェニシア人は既に地中海を航海して各地との間に交易してをり、遠くは大西洋にまでも伸びてゐた。もとよりフェニシア人はアラビアの物資が多く印度産のものである事實を知る由もない。されば、印度及びアラビアの物産は一括してアラビアの商品の名の下に、フェニシア人の手を經て地中海方面に傳へられたのである。即ちその中には肉桂、沒藥、乳香、チトローゼ等の香料がアラビアから

傳へられたことになつて居る。（ヘロドトス三―一〇七。ストラボー一四―四―一九等）

かくて、紅海におけるアラビア人とフェニシア人との交易が、アラビア人の印度向け航海を益々刺戟する結果となり、船舶の往來が盛んになるに從つて、自づから海賊の出沒を見るに到つたのである。これが皇紀前一世紀頃と考へられるが、この事情については、かなり古い記事にも見えてゐる。例へば、ヘロドトスの中にも、紅海の危險を述べて、「しばしば海上の危險が報ぜられて、そのために船舶は港を出ることが出來なかつた……」（ヘロドトス）

「ペルシャ灣の海賊平定は、前六九四年（皇紀前三四年）に、センナ・ヘリブによつて行はれたが、之を十分に鎮定する能はず、ゲルラーに定住することを認む……」（ストラボー一六―五三）

こゝに云はれてゐる紅海とは、現在の紅海を指したものではなく、現在の紅海及びアラビア南部より印度に達する廣域を含むものである。（ヘロドトス一―一）

〔註〕古へはペルシャ灣を「綠海」と呼び、然もこのペルシャ灣なるものは、アラビア海をも含んでゐた。

Ⅱ

フェニシア人については、ヘロドトスによると、

「以前エリトレア海岸に住んでゐたこの民（フェニシア人）は地中海に移住し云々……」（ヘロドトス一―一）

とあり、且エリトレアは單に紅海のみならずアラビア海を含まれてゐるものと考へられる。さりながら、フェニシア人の活動舞臺が地中海にあるとの說を裏付ける文獻は二三に止らず、今、次に列記するものゝみにても四つを數へねばならぬ。

Ⅰ　舊約士師記（十章六節及び十八章七節以下）

Ⅱ　列王紀畧。上。（十六章三十一節）

右二書には、フェニシア人はシドン人として見えてゐる。この時代、フェニシア人には民族總稱の一定せる名稱なく、彼等の住む都會名を以て呼ばれてゐた。シドンは元より地名であり、地中海に面するシリアの良港である。

Ⅲ ホメロスのイリヤス。（第六節二〇〇行）

Ⅲ ホメロスのオディセイア。（十五節一一八行）

右二書においてもシドン人はフェニシア人であることを明らかにしてゐる。

右に擧げた地中海説に對して、紅海説を裏付けるものは、ヘロドトスの前述の記事の他に、フェニシア人と呼ぶこの名稱の由來である。

初めフェニシア人には一定せる名稱なく、彼等の住居する地名を以て呼ばれてゐたが、之にフェニシア人なる名稱を與へたのはギリシャ人である。而してギリシャ人は、フェニシア人の住む海岸の椰子樹の幹の赤さにポイノス（Phoinos）といふ形容詞を附し、この形容詞からフェニシアと呼ぶ名稱が出たといはれて居る。

この説が正確とすれば、紅海説が非常に有力となる譯であり、更に、列王紀畧上（九―二六―二八）に、シドン人が紅海に住んでゐた事實を明らかにしてゐるから、紅海説をとつてよいものと思ふ。從つて、紅海において、彼等がアラビア人と交渉を持つに到つたことは當然の歸結として考へてよいことになる。

いづれにもせよ、アラビア人は印度の物資を運び來り、フェニシア人は之を中繼して地中海方面に賣り捌いたのである。彼等の活躍舞臺は主としてアラビア海及び紅海であつたが、別して紅海は常に風向きが一定せず、且、暗礁が多くて航海には極めて困難な海である。さりながら、右の如き惡條件を克服してこの海に訓練を受けた彼等であつたがゆゑに、後日、フェニシア人は地中海を經て大西洋に活躍することゝなり、アラビア人は、印度洋から支那海にかけて雄飛するに到るのである。

以上、紅海を中心とするアラビア人の活動については、殘念にも明瞭、且詳細なる記述をなし得なかつたが、アレキサンダー大王の東方進出に到るまでの時代は、文献を殘すべく期待される唯一の存在であつたギリシャ人が東方に關心薄く、從つて何の記述をも殘してをらない有樣であり、僅かに得られる文献としてはアラビア商賈の手記になる不確實な記錄しかないので、之は已むを得ないことゝいはねばならぬ。

唯、先史時代において、アラビア人は早くも季節風の利用を知つてゐたといふことを擧げ得ることに滿足すべきである。

Ⅲ

アレキサンダー大王がインダス河を渡りパンジャブ侵略（三三四年）の後、部將アリアヌスが、インダス河口に船を送つて、ペルシャ灣と印度との古い交通路を復興しようとしてゐる。その航海の記錄によれば、初めの間は、

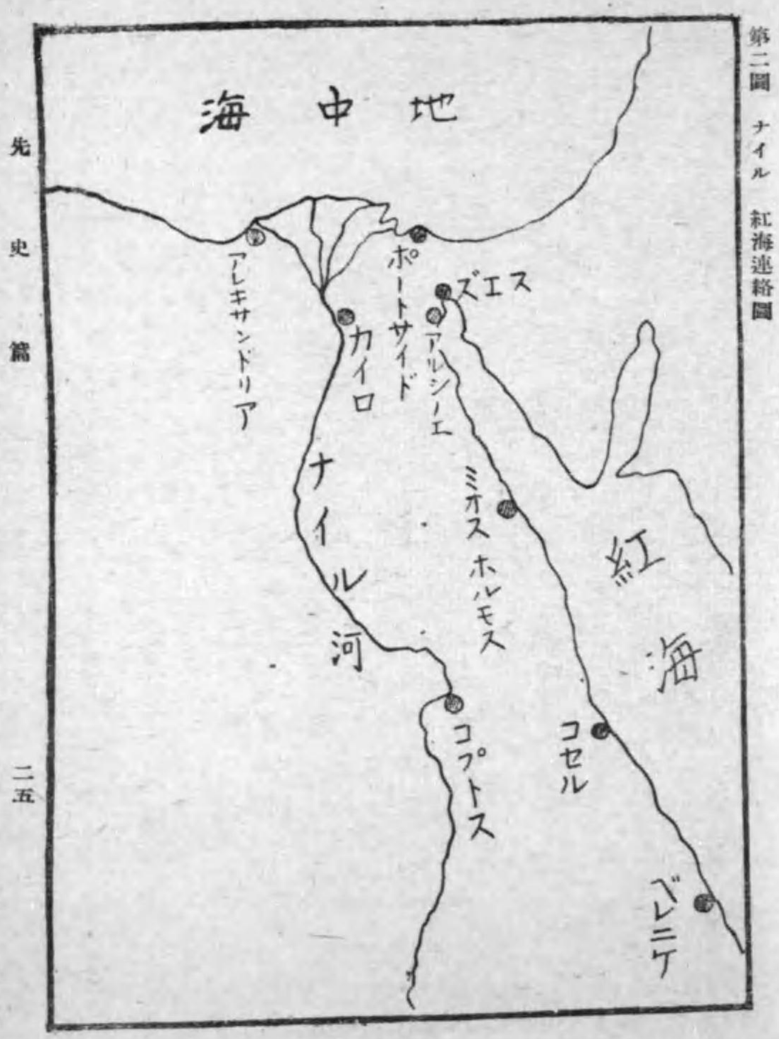
「日沒前に上陸して海岸に宿營した……」

とあり、次第に南下してモサルナにて水先案内を備うてからは、

「陸上に宿營せず海上に停泊した……」

と見えてゐる。これによつて見れば、彼等の航海が極めて幼稚であり、遠くアラビア人に及ばないことが明らかである。

その後、プトレミー王朝（三三九年——六三一年）の時代に到ると、シリアに興



第二圖　ナイル　紅海連絡圖

つたセリューコス王朝（三四九年――五九六年）に對抗するため對印貿易を奬勵し、プトレミー・ヒラデルフス（三七六年――四一四年在位）は、物資輸送のためにコプトスと紅海との連絡を計畫し、紅海沿岸に、コセル及びベレニケの二港を開いてゐる。この結果、紅海岸に陸揚げされた物資は陸路コプトスまで十一日にして達するに到り、コプトスより舟航によつてナイル河口に達したのであるが、更にこの行程を短縮するために陸揚港の所在を北方に移し、新たにミオス、ホルモスの港を開いた。かくて、ナイル河口までの行程は七日間に短縮されたのである。而して、陸路の交通はラクダを用ゐて沙漠を横斷したと、プリニーの「博物誌」に見えてゐる。（六―一〇四）然るに、貿易が盛んになるにつれて、陸路の交通のみをもつては滿足することができず、やがて、アルシノエとナイル河とを結ぶ運河が開鑿せられ、紅海から齎される物資は舟航をもつてアレキサンドリヤに運ばれるに到つた。

こゝに一考を要することは、紅海における交易船が果して何人によつて操られたかといふことである。依然としてアラビア人の手によつて行はれたものか、或は、アラビア人がエジプト人を敎導した結果エジプト人が單獨にて航海し得たものか、その何れなるかは明らかでないが、前後の事情より推して、對印航路も紅海の舟航も大體においてアラビア人の手中にあつたと見てよいであらう。

ギリシャ人が印度洋まで進出してゐたことは考へられない。尤も、後には商人にして出向く者もあつたやうであるが、これ等は不確實な商人の記錄によつての推察であるから、そのまゝを信ずることは出來ない。

次いでロマ時代に到ると、エジプトの支配者の印度に對する關心が次第に衰へてゆき、その結果、海上貿易は減退し、從つて海賊も見なくなつて、それまでは必ず武裝して航海した船も、この頃にはその必要がなかつたと傳へられてゐる。而して印度の物資にしてロマに流入するものは陸路を經ることゝなり、主としてロマ帝王乃至貴族のために供する奢侈品に限られてゐた。記錄によれば、時には陸路四年を

要したこともあり、皇帝ネロの妃の葬祭には、アラビア年産額の三倍半に餘る香料を、僅か十日間に費したと云はれる。（プリニー「博物誌」一二―一八）

かくしてロマの金は夥しく海外に流出した。印度にて發掘されたものでも、金貨六一二枚、銀貨一一八七枚と傳へられてゐる。

これによつて見るも、ロマ人にとつて、東方の物品が如何ほど羨望の對象となつてゐたかゞ窺知し得られるのであつて、やがてロマは垂仁天皇の頃より景行天皇の御代にかけてアラビア遠征を起すことになる。然もこの遠征は、印度の香料や寶石が唯一の目標であつたと、ストラボーもプリニーも指摘してゐる。

ロマ帝政後、アレキサンドリアの隆盛に伴ひ、此處の商人にして印度洋に進出する者が增加し、中にはロマ人も混つて、アラビア人が獨占してゐる印度洋に割り込み運動を演ずることゝなるがこの現象は先の遠征の結果と云ひ得やう。而して彼等がこの進出によつて獲たるところは甚だ多く、西紀四五年頃ヒッパルスは初めて季節風を發見し（そのためヒッパルス風とも呼ぶ）、後四七年頃に、ヴィンセントによつて之が確證せられ、後更に「印度洋航海案内」[註](Periplus Maris Erythraei) が發行せられて粗笨ながらも東方の情勢が漸く明らかにされた。

「印度洋航海案内」は東方における交易の品名を列擧し、また印度洋におけるアラビア人の活動を傳へると共に季節風のことにも及び、この風を利用して夏の中頃に出ると約四十日にして印度に達すると述べてゐる。

同書の五七節によると「……始めて舵手のヒッパルスが交易地の位置と海の樣子とを熟知し大海横斷の航路を發見し、再來季節風の頃に局所的に吹く西南風の名にヒッパルスと呼ばれるやうになつた云々」とあり、プリニウスの場合でも、アレクサンデルの部將ネアルコスに依るインダス河口よりペルシャ灣への航海は未熟なる沿岸航路をとり、後にはアラビアの最東端シアグルス（ラス・アル・バット岬）よりインダス河口に季節風を利用して直航したことを示してゐる（N26）等の記事が

〔註〕著者は不詳なるも、アレキサンドリアにて發行されたものであり、一説には西紀六〇年頃の著作と推定されてゐる。

見られる。

さりながら、之等ロマ人にとつての新發見は、アラビア人には何等驚異に値することではなく、アラビア人の知悉してゐる事柄を、凡そ六〇〇年も遲れて知るに至つたのであつて、然も彼等が之をば如何にも偉大なる發見の如く扱うたまでゞある。

第二章　印度洋の活躍

I

初めインダス河口に達したアラビアの船は、やがて貿易の利を求めて次第に南下し、つひに南端を迂廻してセイロン島に到つた。これはアラビア人による新航路の發見である。勿論これよりも後、ロマ人アンニウス・プロカムスが同じくこの航路を辿り（プリニー「博物誌」六―二二）、その記錄には「南印度よりセイロンまで半月を要す」と記してゐる。

さて、セイロン島に達したアラビア船は、再び北上を開始した。この當時、ロマ船も之に追從せんとしたが、却つてアラビア船の妨害に會ひ、彼等の希望のまゝに行動をとれなかつた。アラビア船のかゝる態度は、この時を以て初めとすることは

出來ない。貿易の利を獨占するために、他國船の進出を努めて妨げるといふことは當然考へられることであつて、ロマ船が印度洋に進出せる當初より、この種の小ぜりあひを反復してゐた。前掲の「印度洋航海案内」もこの事に觸れてをり、「アラビア人から教へられるところは甚だ少い」と指摘してゐる。この事には、却つてアラビア人の海上活動に優越を認め、何ものかを學びとらむとしたが與へられなかつたことが窺はれる。

かゝる狀態にありながら、ロマの船舶もかなりの活躍をしてゐたらしく、然も、南印度に植民地を持つてゐたのではないかと思惟される事情は、同方面において多量に發掘されるロマ青銅貨によつて首肯されるのである。

プリニーも、この事實について、

「多くの貨幣が失はれ、その代償として何を得たかと云へば、奢侈におちいる風が盛んになつたに過ぎない。……必要品がもたらされるならば兎も角も、却つてその健康をさへ失ふものばかりが入つてくる……」（「博物誌」一二―三七）

と述べてゐるが、この言葉より考へるならば、プリニー彼自身は、ロマ船の對印貿易を餘り歡迎してゐなかつたものゝやうである。

さりながら、印度洋に進出したのは、果して純粹のロマ人であつたらうか。この點に關しては疑問を入れる餘地は多分に存し、ロマの支配下にあつたギリシャ人が、貿易の利を追うて航海し、ロマに賣り込んだのではあるまいかとも考へられる。即ち、ストラボーが、

「東方より絹が入つてくる」と云ひ、

「蜜ではなくて声から取れる砂糖[註]が入つてくる」（ストラボー一五―一―二〇）

と云うてゐる點に注目すれば、ロマ人以外の民族が、對ロマ貿易に存在したことが考へられる譯である。

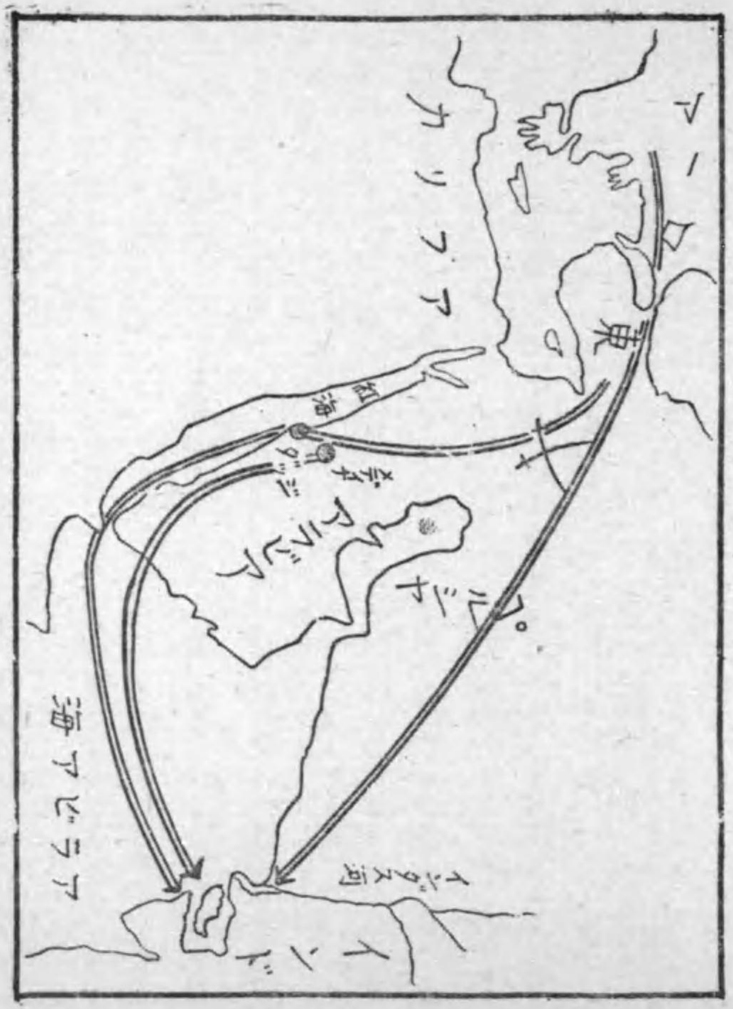
されば東方よりの珍品が獨りアラビア人のみによつて齎されたものではなかつたにせよ、この船が入港すると非常に歡迎されたことは、この時代の記錄によつて十

〔註〕砂糖は初め印度のものが、ネアルクスによつてロマに傳へられた。

分に窺へることであり、從つて商品も飛ぶやうに賣れたであらうことも考へられ、エティオピア人などは「絹が手に入らない」と、こぼしてゐる事情なども、十分に首肯し得るところである。

絹と云へば、この時代の絹貿易は、アラビア人に獨占されてゐたゝめ、東ロマでは、この購入に多額の金を失してゐるが、これがために進んで養蠶業を興さんと企圖したやうであり、蠶卵紙を入手するに非常な苦心を拂つてゐる。一説によれば、支那から入手し、ユスティニアヌス帝（一一八八年―一二二五年）のときコンスタンティノーブルの宮廷にて飼育されたと傳へられるが、こゝに至るまでは、絹のためにアラビア商人の巨利を許さゞるを得なかつたのである。當時、南部アラビアのサバに灌漑用の大貯水池が開鑿せられ、深水一二〇尺、周圍七里に及んだと云ふ。以てアラビアの繁榮の一斑を窺ふに足る。

II



第三圖　東ロマ　ペルシヤ交戰によるアラビア船航海圖

アラビア人の交易航海が、かく盛大に赴いた理由の一つに、東ロマとペルシャの抗爭を擧げ得られる。卽ち、兩國が修好狀態にある時は陸路の交通を以て交易が行はれ、自然と、海上活動が或る程度封せらるゝことゝなるが、兩者間の平和が破れて陸路交通が杜絕えるときは、海路が東ロマへの唯一の輸入の道となるわけである。ゆゑに、アラビア人が東ロマとペルシャの國交に關心を拂つたのは當然の歸結であり、殊に、クルアーンの一節に、

「ロマは近時ペルシャに破れたが、ロマ人は數年の間には勝つであらう」（三〇―二）

と浩瀚なクルアーンの中に唯この一語だけではあるが東ロマ對ペルシャの關係に觸れてゐるなどは、アラビア人の氣持を傳へるに十分なものがある。もとより、ムハンマッドは道を說いたのであるが、彼も亦兩國の關係に關心を寄せてゐたことを否むべくはなく、ムハンマッドは全アラビア人の關心事を巧みに捕へ來つて、みちを說くに事寄せたのである。

さて、セイロンを北上していつたアラビア船は、順路としてビルマに達し、更に東進してマライ半島に至り、やがて南支那海に現れるのであるが、然し彼等が何時マラッカ海峽を越えたのであるか、その時を明らかになし得ない。西紀三〇〇年頃（應神天皇の頃）まで遡り得るといふ說もあるが、明らかな文獻なく不確實である。降つて西紀四〇〇年（履中天皇の頃）頃に至れば確かに彼等の姿がこの海峽に見受けられ、西紀七〇〇年頃（文武天皇の頃）に至れば、アラビア人の外に回教徒となつたペルシャ人及びユダヤ人も加はるに至る。更に時代を經過して廣州（廣東）にアラビア人の勢力がある程度扶植され、一四一七年の史思明の亂の平定には、阿蒲恭弗の力による處が多いが（新唐書一三七）、しかも行賞に對する不平からその翌年叛民の殘黨と協力して市街に放火した回教徒があつたほどであり、更に一四五五年には、杭州に彼等の政治的活動が始つてゐる。而して彼等はかくの如く南支方面に根據地を持つばかりでなく、マライ半島方面のカラーを以てこの方面の最後の據點となしてゐたのであつて、西歐向け貿易の利を追つて、東印度諸島にも雄飛するに

到るのである。

一　Ⅲ

先に、アラビア船はロマ船に妨害を加へて、自由の行動を許さなかつた經緯を述べたが、アラビア人は、確かに印度洋の獨占權を保有すべく、かなりの謀略戰を演じてゐる。

アラビアン・ナイトは勿論この頃よりも遙かに後代の作品ではあるが、有名なシンド・バットの物語は一體何を語つてゐるのであらうか。これは恐らくマライ方面から南支にかけての怪奇な航海譚を集めたものであらうが、この物語に溢れる怪奇趣味といふものは、當時のアラビア人の持つ想像力の逞しさとも見られると共に、他面、發展途上にある彼等の夢多き生活意識の現れを示したものとも見られやう。さりながら、既に早くより印度洋を征服して遠洋航海に馴れてゐる筈の彼等が、何故、かくまでも海の恐しさを傳へねばならなかつたのであらうか。これはアラビア

人の一種の謀略であつたとは云へないだらうか。他民族に教へるに海の恐しさを以てし、而して彼等の海上進出を封殺して、何時までも海上獨占權を保持せんとしたものと考へて居たとするならば誤りであらうか。

この種の謀略に等しい行爲は外にも興味ある例を求め得られる。即ち、後漢の時代、和帝の永元九年（七五七年）に、班超の命令を受けた甘英が大秦國に通商せんとして出向いてゐるが、その時の報告に、

「海水廣大、往來する者、善風に遭へば三月にして即ち渡るを得。若し遲風に逢へば、また二歳なるものあり。故に海に入らんとする者皆三歳の糧を有す。海中よく人をして土を思はしむ。戀慕して屢々死亡するものあり」

とある。思ふに、アラビア人か乃至はペルシャ人に航海の困難を說き付けられたのであらう。右の報告文には支那式の誇張があるとしても、彼が盛んに脅かされてゐる樣を彷彿せしめるに足る文字である。

印度洋及び支那海にかけて、かゝる謀略を用ゐられるほど、アラビア人の海上勢

力は壓倒的に優れてゐた。謂はば、海上正に敵なしとも云へるのである。

〔註〕ポリビオスに依ればフエニシヤ人も他民族に航路を教へなかつた。時に、彼の後方より從うて來る船がある場合には、態と暗礁に乘り上げ、他船が斷念して歸るのを見届けてから徐ろに離礁するのを常となし、この損害は當局において負擔した。

興隆篇

第一章　概說

I

紅海及び印度洋におけるアラビア族の活動は既述せる如く敢爲勇猛であつたが、この海域における限り、彼等は遂に武力に訴へねばならぬほどの敵を持たなかつた。彼等にとつては正しく交易の寶庫とも稱すべき東方海域及び南方海域を何人にも妨げられずに堂々と航海し、彼等の望んでやまない物資を、同時にまた西歐の求めて已まない珍品を、思ふがまゝに入手し得たと云つても過言でなかつたのである。

かくしてアラビアの經濟的基礎がかたまるに從つて、海洋制覇の意慾が地中海に向けられたことは、正に然かあるべきことで、特に地中海の制海權の獲得が、貿易の利益を更に增大せしめる事實を知悉せる限りにおいては尙更のことである。

さりながら地中海は、紅海や印度洋とは異つて國際關係において複雜であり、然もこゝには、東ロマなる强敵もあつて、しかく簡單にアラビア人の制壓を許されなかつたが、敵あるがゆゑに、アラビア人の意慾は益々熾んとなり、遂に强敵を倒して眞の制覇を行ふに至るのである。

思ふに民族が政治的經濟的に海洋進出をなす場合、彼の力に應じた廣域支配を目論むは當然であつて、幸と云ふべきか不幸と云ふべきか、時に彼の目ざす海洋が同時に他民族の目ざす所である場合、こゝに衝突は免れないのである。殊に、地峽或は海峽の爭奪においては、これは更に激烈を極める。然し、海洋に覇を唱へんとする者にとり、單に地峽、海峽のみの獲得を以て滿足できない。此處を據點として廣域支配を企つるに到る。而して又、一つの占據地を得れば、その對岸に着目するのも當然であつて、かくして次第にその範圍を增大するに從ひ、武力乃至は經濟力のみの依存に止らずして、强大なる政治力を期待するに到る。

即ち、海洋支配は、唯、海上航行權のみを云ふのではなく、同時に海洋を抱く陸

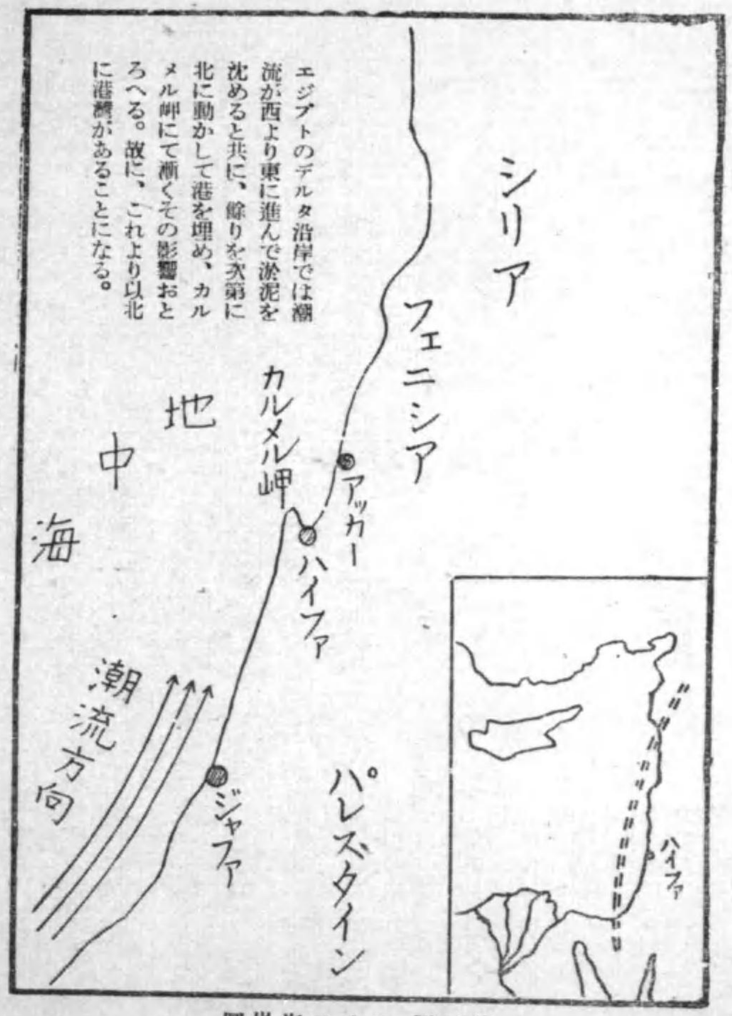
地の支配經營をも包含し、初期にあつては各地に點在せる同胞が各々分散せるまゝに許されてをつても、廣域支配を完全に把握せんとするに到るや、之等の力を結集、統合することゝなる。政治力の要求されるは、蓋し自明のところであらう。

もとより、かゝる大規模の海洋征覇は、旺盛なる民族精神と强力なる武力とに俟つのであつて、一朝一夕の業ではない。されば、サラセン帝國が東は支那海より西はジブラルタルにかけての廣域支配を完遂した所以のものは、一に彼等の不屈不撓の精神力によると云ひ得られる。而して、彼等がこの大帝國を實現せるは、實にムハンマッドの回教提唱後のことにかゝり、回教によるアラビア族の統一といふ事柄を看過し得ない。

これを觀れば、ムハンマッドがこの大業完遂における絶對の力であるやにも思はれるが、一概にかく云ひ切る譯にはゆかない。既に前篇に述べたところを深省するならば自づから明らかなる如く、回教がアラビア族の民族精神を生み出したのではなく、回教によつて忽ちのうちに强大なる統一を見るに到るだけの歴史的基礎が築かれてゐたのである。されば一個のムハンマッドの力によつて初めてなし得たのではなく、彼をして民族精神を喚起せしめるだけの基礎が、先史時代より培はれつゝあつたことを知らねばならないのである。

II

さて、アラビア人は、ムハンマッドの言葉にもある如く、「沙漠の子」である。「沙漠の中のアラビア人」である。從つて、アラビア民族の多くは依然として沙漠の中の生活をつづけ、一部の商人にして利益を追求する者が、敢て危險を冒して海上進出を圖つたのである。さりながら、物資に惠まれるところの乏しい沙漠生活を營む人々に、一度び海上航海の利益の報がもたらされるや、翕然として之に就く者の增えたであらうことは想像に難からぬところである。然も「沙漠の中のアラビア人」が、忽ちにして「海のアラビア人」に轉出せるところに、彼等の敢爲さが窺はれ、また危險なる航海に勇躍したところに、彼等の積極的なる民族精神が窺へる。之は



エジプトのデルタ沿岸では潮流が西より東に進んで淤泥を沈めると共に、餘りを次第に北に動かして港を埋め、カルメル岬にて漸くその影響おとろへる。故に、これより以北に港灣があることになる。

第四圖　シリア海岸圖

同じく牧畜を生業としたヘブライ人とは全く異るところである。

ヘブライ人の定住したパレスチナの海岸は、海上進出を企圖するに必ずしも好適なるものとは云へない。舊約聖書詩篇第一〇四篇二五節以下に海について歌つてはゐるが、實際生活に關する句ではない。同じく第一〇七篇二三、二四節に、「舟にて海にうかび大洋にて事をいとなむ者は、ヱホバのみわざを見、また淵にてその奇しき事跡を見る」と唱へても、それに續く節には、「ヱホバ命じたまへば、あらき風おこりてその浪をあぐ」と、海の恐怖を如實に示してヱホバに祈念すべきを說いてゐる。然も彼等は海に出でて他に航するよりも、寧ろ海を以て越ゆべからざる境界とし遮斷物となした。例へば民數紀畧第三四章第六節に、「西の境においては大海をもてその境とすべし、是を海等の西の境とす」とあるが如きはこれである。かくて、ヘブライ人は遊牧の民たる以上に出ることがなかつた。これは一に海への恐怖がもたらした結果である。

いづれにしても、海は決して安易なる道ではなかつた。アラビア人とても、その

活躍の陰には多くの犧牲を拂つてゐたのである。クルアーンの一節には、

「海上において信者と不信者との區別が明らかにされる……」(XVII 68—71)

と指摘して、信仰に二心を抱く者の肺腑を抉らんとしてをり、更に又、海における異變を説いて反省を促してゐる。(LXXX16)

これを以て觀るも彼等の遭難の事情が窺へるのであり、又、紅海の南端、ペリム島のある海峽は、バブ・アル・マンデブ (Bab al Mandeb) と呼ばれるが、このアラビア語の意義が「涙の門」[註]であり、この一言に故郷を去る舟人の感慨無量なる姿が見られるのではなからうか。然も、萬里の波濤に身を托する遠洋航海の勇士が多く進出すればこそ、かゝる名稱が生じたと云はれる。

さりながら、沙漠に蹋躇してはアラビア族の發展はなく、民族伸展の意慾に燃えにとつて、海の寶庫を忘れることが出來ず、從つて、機會ある毎に海への關心は常に彼等の生命の中に生きてゐたと云へやう。

「海水を墨(インク)に代へても神の恵みは説き盡せない」(「クルアーン」XVIII109)

「七つの海を墨に代へ、陸の樹木を悉く筆(ペン)に代へても、神の恵みは書き盡せない」(「クルアーン」XXXVI21)

「海に船を走らすは神の思召による」(「クルアーン」XIV37 XXI164 XXX30)等

とムハンマッドは述べてゐるが、こゝに「海」を引用して道を説いてゐるところにも、海への關心の片鱗が見られるのではあるまいか。

さて、一二九二年(舒明天皇四年)アラーフの聖旗のもとに、アラビアは統一され、回教圏の世界的擴張を目標に、大進擊の途に出る計畫がなり、將に征途に上らうとした時、教祖は入寂したのである。[註]但、本書においては、陸路による進攻の記述は之を省略し、本書の題名のもとに、回教海軍の海洋制覇の經緯を考察すること

〔註〕この名稱の由來は明らかになし得ない。陸地を視界から失ふために、鄉愁を示したものと見たい。これはギリシア人がペロポネソス半島の東南の岬マレアを廻航した者は家鄉を忘れねばならぬと云はれたのと同巧異曲と云へる。

としたい。

〔註〕一二九二年は回教軍の世界征覇を目ざしての進攻開始の年であると同時に、教祖ムハンマッドの入寂の年でもある。ムハンマッドは、一二九二年六月七日に入滅してゐる。

第二章　回教海軍の建設

I

回教軍の陸路進攻部隊の一はパレスタインを攻略し（一二九四年）、次いでシリアを席巻して（一二九六年）ダマスクスを占領した。こゝに到つて、回教徒は初めて地中海に臨むことゝなる。

右、進攻の間において、回教軍は沿岸の良港を支配し、此處に集つて來る商品を入手すると共に、從來敵側にあつた船舶を供出せしめることに怠りはなかつたが、之等の船を加へたのみを以て直ちに地中海に乘り出すことは出來なかつた。それは、東ロマの海軍が、儼然と地中海の制海權を握つてをり、回教徒の艦船は、漸く占領地域の海岸を防備する程度のものであつたからである。さりながら、紅海に印度洋

に、百戰錬磨の腕を持つ彼等が、東ロマの海軍を恐れて、何時までも沿岸防備のみを以て滿足してゐた譯はなく、漸次、地中海に進出することゝなつた。この時、彼等にとつて大きな誘惑の對象となつたのが、エジプトの穀物であつたことは疑ひない。アラビアの不毛の地に住んで、きびしい自然環境の下に、常に食糧不足を經驗した彼等である。豐沃なるエジプトの平野を、そのまゝ見逃す譯はなからう。

それにしても、回教軍の海上勢力を以てのエジプト攻略は不可能であつた。この時代なほ、東ロマの海軍はデルタの諸港に殘つてゐたし、尙且、アレキサンドリアの海軍力は輕視できるものではなかつた。されば、回教軍はシリアの攻略に次いで陸路エジプトに侵入し（一二九九年）、忽ちのうちにエジプトを席卷して、アレキサンドリアに入城した（一三〇二年）。尤もこの年にはペルシャに對してはネハヴェンドの戰を以て事實上ササン朝を覆し、陸上にては回教軍の意氣は大いに揚つたが、然し、北阿におけるこの攻略は陸路、內陸的のものであつて、敵海軍に對しては何の打擊をも與へてはゐない。從つて、アレキサンドリアはその後東ロマの海軍の襲擊をうけ（一三〇五年）、回教軍としても、そのまゝ放置することが出來なくなるに到つた。卽ち、回教海軍の充實を圖る機運に逢着することゝなつたのである。

Ⅱ

回教海軍の建設については、更に他の理由を擧げねばならない。

エジプトの穀倉を握るや、直ちに擡頭した問題は、之を如何にして本國メッカに送るかといふ懸案である。

これについて、嘗てエジプト王朝時代に設けられたナイルと紅海とを連繫する運河を修めて（二六頁參照）、舟楫の便を以て本國に運送しようとする提案を見たのであるが、當時東ロマと云ふ强大な敵を海上に持つてゐる以上は、却つて敵に攻擊の目標を與へるに等しいとして、この案は放棄された。（これは一二九四年に教皇（カリーフ）に卽位したウマールが、その初世に當つて、紅海で回教徒の船が難破したので氣を惡くしたためとも云はれて居る）かゝる消極策を弄するより、むしろ早急に積極的態勢

を整備するに如かずと、こゝに回教海軍の擴充が行はれ、その結果がやがて戰績の上に現れた。即ちウスマンの治下、一三〇九年にはアブ・カイスに率ゐられた回教海軍はキプロスに進攻して之を占領し、回教海軍最初の勝利を擧げると共に、五年後にはロード島を襲うて敵を破り、更にその翌年フェニクス山附近の海戰に於ても敵を擊破してゐる。かくてエーゲ海の制覇なるや、回教海軍の力は次第に增大しつつ西に向ふことゝなる。而してアレキサンドリアに大艦隊を建設[註]することゝなつたのである。

この意味は、少くとも東部地中海並にエーゲ海の制海權を完全に手中に收めんとするものである。事情こゝに到つて、東ロマも默過することは出來なくなつた。エジプトの穀倉を失ひ、アレキサンドリアを敵の海軍根據地に置き代へられ、しきりにエーゲ海を狙はれるに到つたからである。

〔註〕回教海軍の建設は、この時代（一三一〇年頃）より一三六〇年まで約半世紀を要してゐる。この間、回教軍の北阿進攻は愈〻西に進むが、陸路進攻と共に海軍の建設を並行せしめ、順次、制海權を把握していつた事情は忽せにすることが出來ない。

さらにこゝに注意すべきことは、一三二九年には、シチリアに對する第一擊を加へてゐることである。縱令、その結果が大したものでなかつたにもせよ、かゝる多角的攻擊を行ひ得たところに、回教海軍の餘裕が見られるのではないか。

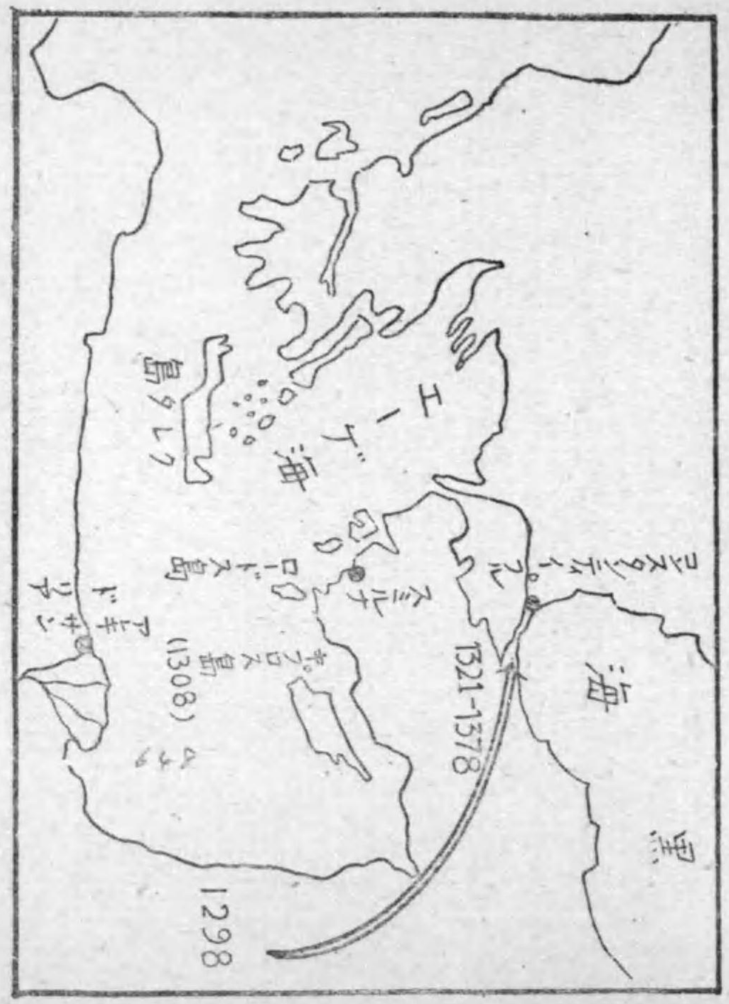
かくて東ロマ對回教軍の海上衝突は、今や必至となるに至つた。

第三章　コンスタンティノープル攻防戰

I

アレキサンドリアにおける回教海軍の擴充が進捗して強大となると共に、ウマイア王朝がダマスクスに都するや（一三二一年）、いよいよ東ロマ攻撃の方針が確立した。卽ち、陸上進擊を開始してフェニシヤ海軍を支配下におき、一方アレキサンドリアの海軍はエーゲ海に侵入して海上よりの攻撃をなした。目標はコンスタンティノープルである。

陸海兩面よりするこの攻擊は激烈を極め、一時はコンスタンティノープルも危殆に瀕するかに見えたが、東ロマ海軍は必ずしも衰へず、よく回教海軍の行動を妨げ、漸く陷落をまぬがれた。さる代り、回教海軍はエーゲ海の制海權を確保し、マルモ



第五圖　コンスタンティノープル攻撃路

ラ海のキチクスに海軍根據地を前進せしめた。

地の利を得た回教軍は、冬はキチクスに退いて軍容を整備し、夏には出でて攻擊し、執拗に喰ひ下つて攻擊を斷念しなかつたが、之また容易に陷落しなかつた。

ともかくも、コンスタンティノーブルの攻防戰は火蓋を切つたのであつて、以後、八世紀の初期まで、約半世紀にわたつて斷續するのである。

この間東ロマ軍は屢々「希臘の火」を用ゐて回教海軍を惱ましてゐるが、これは如何なる形式のものであつたか。

繪に描くところを見れば筒より火を噴いてゐるが、七世紀の初めカリニックスの發明にかゝり、東ロマに傳へられたものであると云ふ。「希臘の火」は別名「液體の火」とも云はれる。水中にても消えなかつたがゆゑである。東ロマ軍の戰法は、この火を犧牲船にしかけて敵船艦に迫らしめ、敵にこの火を投ずるのである。然も前述の通り水をかけても消えなかつたから、回教軍も、これには手のつけやうがなかつたらしく、この火戰をめぐつて、種々の怪奇な風說が殘された。

D2429

「水に消えない火」とは何であつたのであうか。スバルタ人がプラテア攻擊の時（皇紀二三二年）、このやうな火を以て城壁を燒いたといふ記錄があるが、ピッチと硫黃と以て裝置したものであり（ツキディデス II77）、五年後にデリウムの攻圍のときも炭火を城壁に仕掛けたとある（ツキディデス IV100）。東ロマの使用したものは、之と同一でなかつたことは明らかである。それでは既に硝石を使用してゐたのであらうか。然し硝石の使用は明らかに我が鎌倉開府以後で、西紀十三世紀以降のことゝされてゐるから、他の藥物としなければならない。この點、遺憾ながら今日においては明らかになし得ない。

東ロマはこの火の秘密を守るために、極めて少數の者にしか傳授しなかつたといふから、尙更、その內容を窺ふに困難である。後年、この火に使用されたと思はれる筒を發掘してゐるが、この筒によつて藥品を推定することもできなかつた。

いづれにもせよ、東ロマは當時における科學戰に勝利を收めたものであり、勇敢な回教軍も、遂に科學戰の前には退却を餘儀なくさゝれたのである。

II

しかし第一次の攻撃以後、回教軍は餘り振はず、數年に亙つた攻撃も冬にはキチクスに退いて活動を中止するのを常として居た。殊に一三二四年の夏期攻撃において打撃をうけて後しばらくは沈默を餘儀なくさゝれ、次いで、三年後にはキチクスの根據地を燒き拂はれ、一三四〇年には前ウマイア朝のムアーウィア一世殁するなど、相踵ぐ事情のために、攻撃を中絶するの已むなきに至つた。

然し間もなくアブド・ゥル・マリク（一三四五年——一三六五年）の治世下において、再びコンスタンティノーブルの攻撃を開始した（一三五五年）。相手は東ロマのユステニアン二世（一三四五年——一三五五年）である。回教軍は以前の攻撃の場合と同樣に、海陸並び進攻したが、依然として、コンスタンティノーブルの牙城は搖がなかつた。

東ロマにおいても、徒らに回教軍の來るを拱手して待つてゐたわけではない。レオ三世（一三七六年——一四〇〇年）位に卽くや、積極的に回教軍の反擊を企圖した（一三七七年）。彼は海陸共に多數の傭兵を使用し、ために、東ロマの經濟に危機を招くほどであつた。然るに、この大規模の反擊も功を奏するに至らず、漸く回教の陸上軍を擊退し得たのみで、海戰は却つて敗北した。然しこの場合も「希臘の火」と「火船」の利用で、辛うじて回教艦隊を喰ひ止め得たのである。かゝる有樣であつたから、回教軍が、なほ一押し積極的に出る好機會であつたにも拘らず、提督スライマンの急死のために、軍を收めねばならなかつた。

翌一三七八年、回教海軍はアレキサンドリアより急遽來援した。正しく機敏な行動であつた。尙且、再三に及ぶ「希臘の火」の辛い經驗によつて、之が防禦法も心得るに至つたので、東ロマ軍の戰法はものゝ役にたゝず、今や、回教軍は必殺の擧に出得るものと期待されたが、遺憾にも回教軍も、その質において低下してゐた。船舶は三六〇隻から四〇〇隻にも及んでゐたにも拘らず、乘組兵員の中には多分に

回教徒ならざる者も含まれて居り、之等が脱走して東ロマに内通するものが生じた。敵の内兜を察知したレオ三世は、すかさず大艦隊を繰り出して、海上の大決戰を挑み出た。

この海戰は決定的に東ロマの勝利に歸した。回教軍としては恰も前年の東ロマ海軍の轍を踏んだわけである。總てが傭兵ではないとしても、狩り集めの兵員の脆弱さを如何ともなす能はず、回教軍の船艦は多く擱坐するか鹵獲されるかの運命に落ちた。こゝに到つて回教軍は軍需品の補給にも事を缺くことゝなり、遂に一切を斷念して一三七八年の八月、軍を引き揚げた。而して、この時の回教軍の報告によれば、初め出動せる十八萬の兵員中、無事にダマスクスに歸る者は、僅かに三萬人に過ぎなかつたと。以て、回教軍の蒙つた打擊を知るべきである。

一三二一年より計畫されて一三七八年に及ぶ、前後約六十年の長期に亙つたコンスタンティノープル攻防戰は、こゝに一段落を告げる。東ロマの勝因は、一にレオ三世の戰略の良さにあり、彼がブルガリア人を味方にしたことは、この最後の一戰に多大の勝因を作つた。因みに、コンスタンティノープルの攻擊はその後行はれず、オスマン・トルコ興起するに至つて、二一一三年初めて回教徒の手に落ちることゝなる。(メフメット二世の治下。一四五三)

而して、之は後述の如く、敵の背地に於ける行動により、攻略の成功を見たのである。

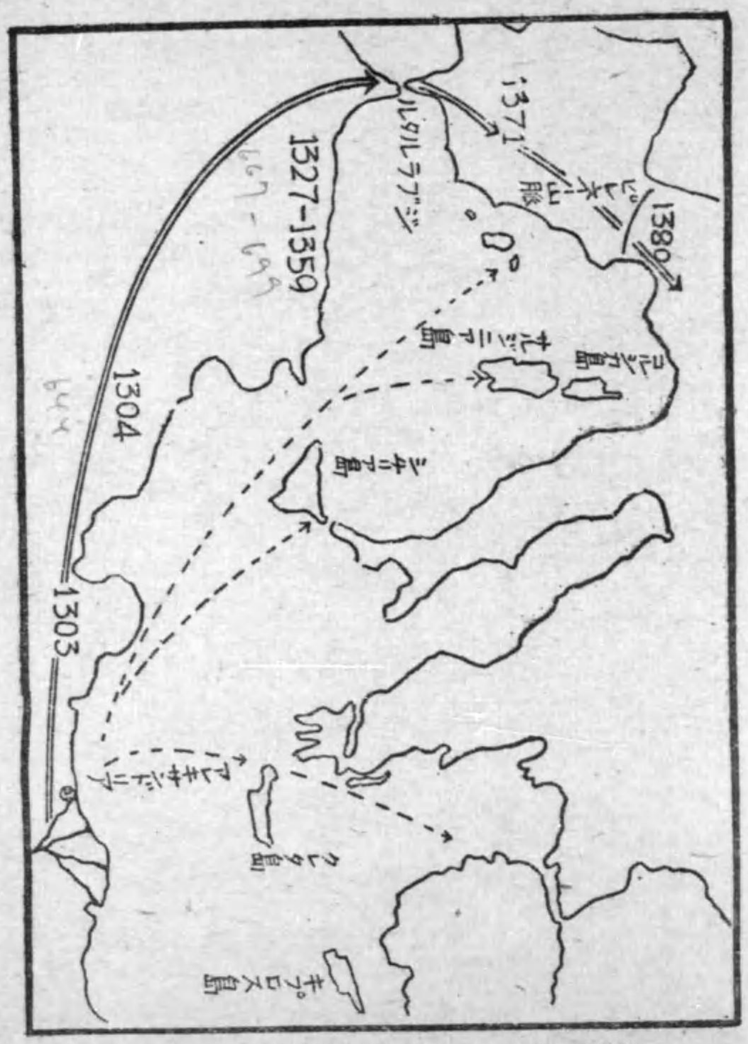
第四章　東部地中海の爭奪

I

コンスタンティノープル攻防戰が展開されてゐる間に、アフリカ遠征軍はエジプトを起點として着々攻略の軍を進め、遂にアフリカ西端に達し、一三七一年には、後世ジブラルタルと呼ばれる海峽を越えて、イベリア半島の一角にアラーフの旗を飜した。

嘗てロマが北アフリカに遠征を試みたのは、カルタゴを討つためであつたが、カルタゴの滅亡後は海上に關心を拂ふこともなく、またアフリカ經營に深い意を用ゐることもなかつた。ロマの場合は、單に、この海岸線を攻略したに止るのである。

然るに回教軍の場合は、全く之と趣きを異にしてゐる。卽ち、本國アラビアの沙



第六圖　北東アフリカ海岸遠征圖

漠生活を經驗してゐる回教軍は、單に海岸地域のみの攻略を以て滿足せず、深く內陸にも意を用ゐて、沙漠地帶の經營を忽せにしてゐない。加之、アレキサンドリアの海軍根據地の充實を圖り、只管に制海權獲得を目ざしてゐたのである。

されば、ロマの攻略と比較すれば、兩者の長短は自づから明らかである。ロマの皮相なる攻略に對して、一は陸上に深い根を持つた制海權を確保しようとしてゐる。

由來、アフリカに大軍を動かさんとする者には、地中海の制海權を有することが絶對に必要とされる。これは、回教軍のこの遠征の時から既に明らかである。ギボンも「陸の征服のみならず併せて海上權を握るまでは回教徒も大軍を動かすことが出來なかつた」と述べてゐるが、この法則は今日においても變らぬところである。

沙漠生活に馴れ、沙漠における行動を知悉してをる回教徒にして然り、況んや、乾燥地帶の生活を經驗しないヨーロッパ人に於ては云ふまでもない。

さて、北アフリカを席卷せる回教陸軍は、アレキサンドリアの海軍の掩護を受けてゐたとは云へ、あながち有利なる進攻に始終したのではない。エジプト侵入以來、當時はヘルキュスの柱と呼ばれてゐたジブラルタル海峽に達するまで約六十年を閲してをり、然もこの間、時にはシチリア島邊りより東ロマ海軍の側面攻擊を受けてゐる。

回教海軍の勢力漸く增强しつゝありとは云へ、少くとも中央から西部一帶の地中海が、未だ回教軍の手中にあらざるこの時期にあつては、右の如き側面攻擊を許さねばならぬ狀態にあつたわけである。

さりながら東ロマのこの攻擊は、却つて回教海軍をして充實せしむる刺戟となり、回教軍に幸ひしてゐる。アレキサンドリアでは專ら船艦建造に力を注いだ。

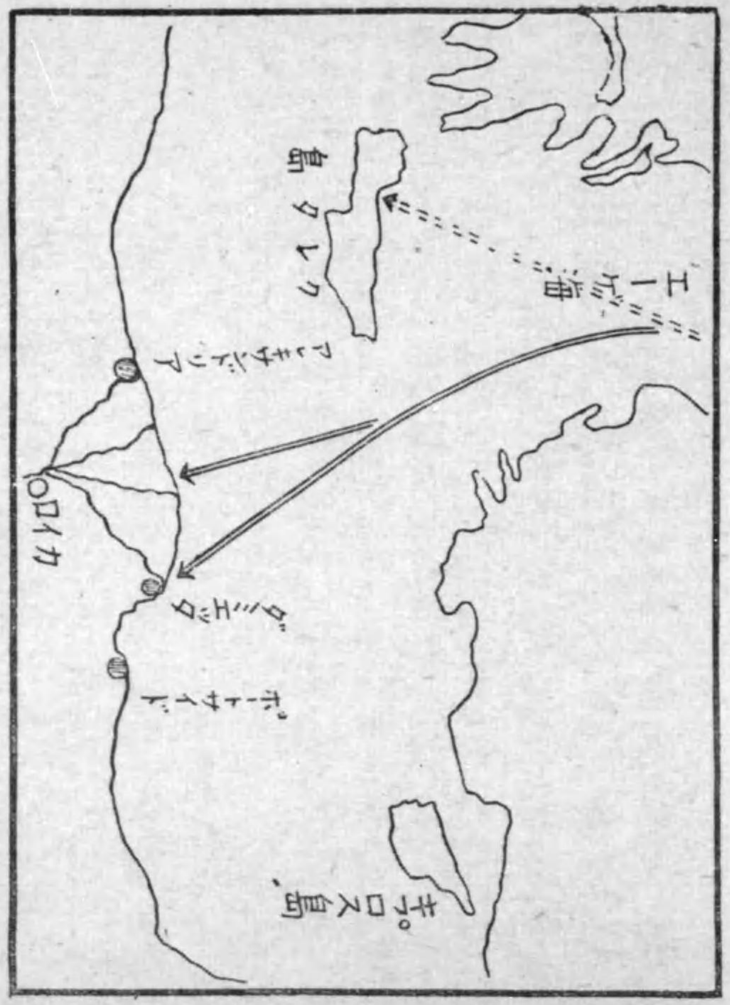
II

北アフリカを一應征服してみると、こゝに自づから着目されるのは目前に横たはるシチリヤ島である。地中海の最大島として中央に位し、地中海を東西に二分するこの島が何人の手中に落ちるかは、直接、制海權が何人の手に握られるかといふ問

題に結びつく。アフリカ制壓を完成した回教軍が、この島の攻略に意を注ぐことになるのは蓋し當然の歸結である。

かくて回教軍にしてみれば、垂涎措く能はざるシチリアではあるが、直ちに之を討つことは出來なかつた。少くとも、シチリア攻擊に全力を集中する以上は、東地中海の既に占據せる島々の確保を更に完全にしておかねばならなかつた。といふのは、先にコンスタンティノーブル攻擊に失敗して以來、エーゲ海の制海權は再び東ロマに奪回され、且、クリート島も狙はれるところとなつて、東地中海は決して回教側に有利なる狀態ではなかつたがゆゑである。

思ふに、ロマがカルタゴと爭うたのもシチリアゆゑであり、然もこれを支配し得たロマは、遂にカルタゴを徹底的に擊滅しなければならぬ運命を負うたのである。されば、シチリア攻略の成否如何は、回教軍にとつても大きな問題であつたことが想像されやう。從つて、この攻略に當つて、萬全の準備をなしたことも承服するに難くない。



第十圖　東ロイカ島の攻略地圖

こゝで東ロマの立場よりすれば、エーゲ海を奪回したとは云へ、南を劃するクリート島を敵の手中に委ねてゐる間は、依然として海上交通を封鎖された形である。陸路による交易のみでは、東ロマの經濟は立ちゆかない。是非とも海上輸送を回復せんとする必死の目をクリートに注いだのである。然も東ロマは直接クリートを擊たず、クリートを援護するは背後のダミエッタなりとして之を攻めた（一五一三年）。最初の攻擊は失敗に終り、その結果、敵をして防備を嚴重に構へさせることゝなつたが、翌一五一四年以來は單にダミエッタのみならず、デルタの諸港を頻繁に襲擊した。この攻防戰は兩軍の間に幾度となく繰り返されたものゝ如く、一五一六年の二月には、兩軍の捕虜交換を行うてゐることによつても窺へる。

こゝに注意すべきことは、東ロマがキプロス、ロードス、クリートの諸島を以て回教軍の東地中海における第一線と見做さず、これ等諸島の策源地として深くその背後のエジプトを衝いたことであり、この遠征を敢て行うたところに、東ロマ海軍の回復と充實とが知られる。

この事情は、東ロマ皇帝ミカエル三世（一四九九年――一五二九年）の叔父バルダスが、鋭意海軍の擴充を圖つた結果と見られるが、然も、この東ロマ海軍も一五一九年にペルシゥムを攻めたのを終幕とし、その後は内訌のために遠征するまでには至らず、エジプト攻擊は不首尾の裡に終らねばならなかつた。また、その翌年の一五二〇年にアジアの回教軍を討たんとしてゐるが、之も海軍力不十分のために中止の已むなきに到つてゐる。これ等の事情より觀るに、折角、復興せる東ロマ海軍も提督にその人を得なかつたゝめ、再び衰運に陷つたものと思はれる。

恰も、この時は回教軍も振はず、一五二三年には一時的の攻勢に出てゐるが、その結果においては何等見るべきものがなかつた。尙、一五二六年には敵の不振に乘じて、東ロマ軍が執拗にクリート遠征を企圖してゐるが、その事半ばにしてミカエル三世が暗殺されたので、これも遂に中絶してしまつた。

クリートの爭奪戰――ひいては東地中海の制海權の爭奪戰は、これを以て終熄し、この島はその後一〇〇年餘は海賊の巢窟となつた。

かくの如く、東部地中海における兩軍は、何れも決定的な勝負をなし得なかつたため、制海權の問題も何れにあるとは定められないまゝに移行し、やがてヴェニスの擡頭となるわけである。

第五章　シチリア攻略戰

I

所謂ロマの滅亡（一一三六年）以降においては、東ロマの海軍は漸く東地中海、エーゲ海、マルモラ海を防備する程度に止り、從つて、イタリア半島、シチリア島に對しては、十分なる海軍力を割くことが出來ず、時々、敵の虚を突いて現れるに過ぎなかつた。殊に東地中海方面にあつて、回教軍との折衝が繁くなれば、遠く西に隔るシチリアに特別の注意を拂ふ餘裕がなかつた。

元來、東ロマが西歐と親善關係にあるときは、イタリア半島及びシチリアの事は擧げて西歐の勢力に委任し、親善關係の破れるときは、放任しておくといふ有樣である。根據地、コンスタンティノーブルより餘りにも遠いことも、その理由の一に

擧げ得られるが、それにもまして、シチリアは東ロマにとつては、それほどの重要性を認められなかつたのである。

さりながら、地中海の制海權を只管に狙ひ、以て之に隨伴すべき貿易の利を握らんとしてゐた回教軍にとつては、シチリアの制壓を夢寐にも忘れることは出來なかつた。

Ⅱ

新興の意氣に燃えたアッバース王朝（一四一〇年―一九一八年）が、バグダードに成立せるは　孝謙天皇の天平勝寶二年であり、それより僅か二年後には回教側はシチリア及びサルディニヤの支配者に朝貢を要求してゐるが、之を拒絶されるに及んで、兩者間の交渉が急を告げるに到つた。

この事情は如何にもアッバース朝の積極的なる意志を示してゐるかに見えるが、然しアッバース朝は、その首都をダマスクスよりバグダードに移した事實に徵しても明らかなる如く、稍〻その勢力を東方に置きすぎる傾きにあつたゝめ、シチリアに對する攻勢的態度とても、見るべきほどのものはなかつた。

とは云へ、ともかくも、回教軍がシチリア攻略に着手するに到つたことは、今や隱れなき事實である。

以來、兩軍は屢々小競り合ひを演じたらしく、一四六五年に、イブラヒームはシチリアの總督コンスタンティニアスとの間に十年間の休戰條約を結んでゐる。

然るに一四七二年、シチリア沖において回教船がキリスト教徒の船を攻擊し、之に海賊的行爲を働いた事件が起つた。當時の地中海の樣子より考へて、海賊的行爲はさほど重大な事柄とも云へないが、東ロマは之を默過せず、ミカエル一世はグレゴリーを司令官として回教軍征討の艦隊を遣つた。回教軍は之をランペドーサに邀擊した。東ロマ軍は艦船七隻を鹵獲されたが、殘餘の艦隊よく戰ひ却つて回教軍を擊破するに到つたので（一四七三年）、遂に回教側は謝して更に十年間の休戰條約を締結した。

その後十年間は、シチリアを廻る問題は表面化してゐない。假裝的平和にもせよ事なきを得たが、着々として進められる回教海軍の充實は、依然としてシチリア奪取の企圖を示す以外の何ものでもなかつた。殊に、十年間の和平が回教軍に幸ひしたことは、東ロマの對シチリヤの關心が次第にうすれ、專ら東方バグダードに意を用ゐるに到つた事情である。回教軍は秘かに進攻の機を窺つてゐた。恰も、この時更に好機がもたらされることゝなつた。

Ⅲ

一四八五年、グレゴラス總督の部將ユーヘシュゥスが反亂を企て、グレゴラスを殺してシチリヤの實權を掴んだ。そこで東ロマは、直ちにコンスタンティニアスを將として之が鎭壓に赴かせたが（一四八六年）、この征討軍は却つて擊滅されるの非運に陷つた。然るに、こゝにまたユーヘシュゥスに反逆を企つる者現れ、彼の地位の動搖せるを見てとつた部將バラタフは、機を逃さず反旗を飜し、ユーヘシュゥ

スの軍を打ち破つた。ユーヘシユゥスは身を以てアフリカに逃れ、ジヤダット・アラフの許に身を寄せた。

この事件は、かねてよりシチリヤを狙つてゐた回教軍には、正に絶好の機會である。即ち、一四八七年六月十五日、ユーヘシユゥスの援助を口實として大軍を派遣し、先づマザラに上陸して各所にバラタフの軍を擊破しつゝ進攻した。然も回教軍は占領地域には朝貢せしめる事を約したのみで、直ちに之と和を結び、後顧の憂ひを一掃しつゝ前進した。この時、回教軍は、更にイスパニア回教軍[註]の來援を受け、到る處にバラタフの軍を破つて、遂にシラキゥスを攻圍するに到つた。かくて一四八八年には、回教軍の勝利は殆ど確定的のものとなり、待望のシチリアは將に回教軍の手に陷つるかと見えたが、こゝに攻圍軍にとつては思はぬ困厄が起つた。

〔註〕先に北阿進攻軍がイベリア半島に上陸したのは一三七一年であつたが、この回教軍は直ちに西ゴート王國を潰滅せしめ、更に一三七九年にはピレネーを越えてフランスに侵入し、キリスト教徒への攻擊を緩めなかつたが、後遂にフランク王國の軍に壓迫せられることゝなり、ピレネ

ー以南への退却を餘儀なくされた。然しこの間に、イベリアに於ける回教圏の確立されたことは云ふまでもない。後、前ウマイア朝覆滅するや、アブド・ウル・ラフマーン一世はイスパニアに亡命し、こゝに後ウマイア朝（一四一六―一六九一年）を樹立して、イスパニアに於ける回教的政權を統一した。

その一は、凶作による食糧の缺乏である。

その二は、司令官の病死である。

その三は、攻圍作戰の遷延するうちに東ロマの援軍が到着したことである。來援軍はテオドシゥスを將とし、ヴェニス船艦も參加した強大なものである。

その四は、イスパニアの回教徒がフランク王國との間に事を構へたので、シチリアへの救援に束縛を受けたことである。

かゝる諸事情のもとに已むなくシラキゥスの攻圍を解くに到り、然も多くの船を燒却して退却した。

さりながら、シチリヤ攻略戰は、この時を限つて愈々熾烈となるのであつて、回教軍の執拗なる攻擊が倦まず撓まず繰り返される。

Ⅲ

一四九〇年に至つて、イスバニアの回教軍が再び攻擊を始めた。その理由とするところは、先に援軍に赴いたイスバニア回教徒の殘存者を救けるといふことである。この事態は北阿の回教軍を刺戟したに違ひはない。若しこの際イスバニア軍に單獨の行爲を許しておけば、シチリアの實權が彼の掌中に握られることゝなるやも知れないといふ危惧を抱くに到り、やがて北阿軍も亦攻擊に赴いた。

かゝる結果として、シチリアにおける回教軍の勢力は再び增大を見るに到つたのであるが、不幸にも風土病に斃れる者が續出し、後援も續かず、その力は次第に衰へていつた。そこでイスバニヤ軍は見限りをつけ、その大部分は引き揚げ、北阿軍の微弱なる力が漸く餘喘を保つの狀態となつた。然るに、イスバニア軍が引き揚げたと見るや、北阿軍は盛んに援軍を派遣し、積極的な行動を起してバレルモを攻略した。そして此の地のキリスト教徒の財產を保護し、キリスト教を認めることを代償として、此處を回教の都として取り扱うた。

イスバニア對北阿の微妙な交渉は、右、共同作戰の中に早くも看取し得るところであるが、バレルモ攻略後に到つて、愈々之が表面化し、殘存せるイスバニア軍對北阿軍の間に、露骨な勢力爭ひが現れ、折角、挽回せる態勢も、この相剋のために、また〳〵潰滅への途を辿らねばならなかつたのである。

この後もシチリアを繞る攻防戰は尙幾回となく續くが、主要なものを列記すると

一、回教軍ファドルによる攻擊（一四九七年）

彼はイオリア海の敵を討つてエンナに進攻を試みたが失敗す。

一、東ロマ軍、ヴェニスの船艦六十隻の來援を得て攻擊す。

ヴェニスが積極的に動いてゐることが注目に値する。然し戰果は擧らなか

つた。

一、一五二四年、回教軍は有力な艦隊を派遣す。

これも一時は成功を期待される程の戰果を收めたが、指揮官陣歿して不成功に終る。

いづれにしても、これまでの經過は、東ロマ軍にも回教軍にも、敵に止めを刺す程の勝利がない。謂はゞ不徹底な攻防戰が繰り返されたまでゝある。然し、東ロマの關心に比して、回教軍は飽くまでも之を獲得せんとする熱意と努力とを失はなかつたところに、回教側の優勢さを認めないわけにはいかない。

卽ち、一五三八年に到つて遂にシラキュス陷落し、爾餘の要地また之と運命を共にし、一五六二年まで獨立してゐたタオルミナを除いて、シチリアの制壓權は完全に回教徒のものとなつた。かくて、地中海制海權の確保へ、回教軍は絶對優位に立ち、南部イタリアとの交易も開かれるに到る。

752-878

顧みるにシチリア攻略戰は、そもゝ一四一二年にその端を發し、一五三八年のシラキュス陷落まで百二十六年を要してをり、この間、回教軍は幾度かの敗戰にもめげず、執拗之に喰ひ下つたのである。

回教軍最後の勝利は、一にこの粘着力にあつたとも云ひ得るであらう。

第六章　西部地中海の制覇

I

マルタ島　シチリアに次いで注目の的となるのはマルタ島である。嘗てはマルタを以て北阿の所屬となした地理學者もあつたほど、北阿と凡ゆる點において密接な交渉を持つてゐた。

一〇五五年、ロマが東西に分たれた時に東ロマに屬し、やがてチュニジアがヴァンダルの支配下に置かれるに到つてよりマルタも亦一時それに歸屬し、後久しく東ロマの屬領となつてゐた。

回教軍は一五三〇年に之を攻略した。この時、住民は東ロマ軍と共によく防戰し、夥しい死傷者を出してゐる。ともかくも回教軍は一擧にして之を屠り、その後一七五〇年ノルマンのロージャーに征服されるまで、その支配權を握つた。

かく長期にわたつて回教徒の實權が維持せられた所以は、

一には、本土チュニジアと接近してゐること

二には、住民にキリスト教の信仰を承認したこと

三には、住民の海上自由貿易の利を認めたこと

による。以上によれば、この政策には多分に回教的自由主義の色彩を表してゐるが、然も之によつて初めて回教的政權が維持せられたといふ消息を物語つてゐる。

今日、アラビア貨幣が發掘され、工夫文字の碑文が殘り、マルタ語と云はれる土語にアラビア語の要素の含まれてゐるなどを見れば、彼等の支配が相當に根深いものであつたことを窺へるのである。

コルシカ島　コルシカはカール大帝（一四六〇年―一四七四年）に到るまで、名義上東ロマの所屬であつた。回教軍の攻擊は一四六六年に始り、以來、幾度となく繰

第九圖　西部地中海島嶼攻略圖

り返してゐる。これに對してフランク王國は、殆ど回教軍のなすがまゝに任せてゐるが、それは回教海軍に對抗し得るに足る海軍力を持たなかつたことによる。されば、フランク王は、コルシカに關する限り、之を擧げてボニファキウス二世に委ねボニファキウスまた、何の反擊もなさずして終り、その子アダルベルトに到つて僅かに反抗を試みて委託の責を塞いだに過ぎない。

されば、回教軍にとつては、殆ど無敵狀態であつたが、彼も亦コルシカには餘り食指を動かさず、時々出動し來つては沿岸を掠める程度以上には出なかつた。

バレアリック諸島　イベリア半島の東南方に點在するこの諸島は、地理的に見てもイスパニアの支配下にあるべきであるが、一〇八三年ヴァンダルの支配に屬し、後久しくその狀態を保つてゐたが、一四五八年に到つてイスパニアの回教軍が之を攻略することゝなつた。然るにイスパニアにおける後ウマイア朝はアブド・ゥル・ラフマーン三世（一五七二年—一六二一年）以來振はず、殊にムハンマッド二世

（一六六八年ー一六六九年）後は内訌のために衰頽の一路を辿ることゝなるので、バレアリックの實權も之と共に消滅していつた。かくて離れ島たるの位置を利用して、此處に獨立的勢力が勃興し、附近の航行船舶に對して專ら海賊的行爲をなした。

このためヒシャム二世（一六三六年ー一六六九年）の末年一六六九年にキリスト教徒はイスラームに對する十字軍を起し、カタラン人をしてその指揮者たらしめた。征討軍は初めの中よく戰ひ、戰局を有利に導いてゐたが、やがて指揮の統一を失して、遠征の目的を水泡に歸せしめた。

その後、一六九二年、アラゴンのゼームス一世によつて始めて回復されるに到つたが、この時代には既にイスパニアの回教圏は無統一狀態になつてゐたし、本來の十字軍（一七五六年ー一九三二年）も末期に近づいてゐた時で、他地方の回教軍も之を救援する力を持たなかつた。

回教軍の占領中、產業大いに興り、主として砂糖、葡萄等をイスパニア又は北阿方面に積み出してゐた。

サルディニア　シチリアの攻略成就するや、地中海の回教的勢力が伸張したことは云ふまでもないところである。然も西部地中海諸島の制壓が順次行はれてゆくうちに、益々彼の力が加はつたことは明らかであるが、然もこの間、キリスト教徒との間に絶えず武力抗爭をなしたわけではなく、兩者の力が平均してゐた時には、寧ろ和平裡に通商の交渉を進めてゐる事實を見逃すことができない。

サルディニアは初め一一一六年にゲンゼリックによつて東ロマより奪はれ、その後一時的に東ロマに奪還されたこともあるが、ヴァンダルの現出によつて再び東ロマを離れ、ヴァンダルの衰頽によつて漸く東ロマに歸つた。

回教軍の攻擊は一三八〇年頃に始つてゐる。然し東ロマにして見れば、中樞より餘りにも遠いので充分な保護を加へる能はず、一四七五年にはフランク王、ルイ・敬虔王に討伐を依頼したが、元來フランクは海軍力に乏しく、到底回教軍を退けることは出來なかつた。

この結果、シチリアの回教徒が武力に訴へて南部イタリアを侵したに對して、サルディニアの回教徒は、平和の裡に南佛と交易するの現象を見せてゐる。

その後、一六六〇年頃に到り、ムサットが南岸カグリアリに來攻して來たので、法皇ヨハン十八世は、サルディニアにおける回教徒を退ける目的をもつて十字軍の蹶起を宣言した。この遠征軍はピサ及びゼノアの聯合艦隊であり、一六八二年にその目的を達してゐる。然るにピサ、ゼノア兩者間に、サルディニアを繞る所有權の爭ひが起り、法皇も皇帝も共にピサに有利なる仲裁を與へたので、この内訌は却つて紛糾するに至つた。そこで、この隙に乘じてムサット再び侵寇し、一七一〇年までは和戰兩樣の狀態を繰り返したが、一七一〇年遂にムサット敗れ、ピサの所領となつた。

かゝる經過であつたがゆゑに、回教徒の領有期間は短く、從つて政治的の結果においては見るべきものがない。

II

回教徒對キリスト教徒の海上勢力が互ひに伯仲してゐる時には、あながち武力によることなく和平交渉の裡に交易の利を收めようとしてゐるが、兩者勢力が不均衡になれば、例令、如何なる條約が結ばれてをつても、之は屢々破られることゝなつた。然も、之は回教側にのみ云へることではなく、またキリスト教側に云へることでもなかつた。何れが優勢になつても、優勢な立場にある者が武力を振うて海賊的行爲に出たり乃至は大擧攻擊に出たりしたのである。

こゝに見逃すことのできないのは、兩者の和平交渉の間において、自づから回教徒の航海術が他に傳り、キリスト教徒の武器が他に傳へられたことであつて、この事情がまた相互に優位を爭はしむる素因となつてゐたことである。

回教徒によつて西歐に傳へられた物品の主要なものは、米穀、甘蔗、柑橘類、綿製品を擧げ得られる。當時、シチリアの回教徒は大規模の製糖工場を設け、單に回

教圏の需要に應ずるのみならず、多量にヨーロッパに輸出してをつた。綿製品については、西歐人は異教徒の着用品として餘り歡迎しなかつたがゆゑに用ゐられることも少かつたが、然も回教徒の傳へた耕作、灌漑の法は、西歐における農耕に多大の裨益を與へてゐる。

思ふに之等の文物交換が行はれた所以のものは、回教徒が地中海の實權を一應把握するに至つた結果であつて、彼等の東部地中海より軍を進めて西部地中海制壓を完成するに到つた結果を見るものにとつては、嘗て此處に君臨せるカルタゴを想起せずにはをられない。カルタゴは地中海の中樞を扼してゐたが、特に西部地中海を完全に支配するために沿岸の諸港を收め、堂々たる環海勢力圏を形成したのである。回教徒も亦之をなし得た。北阿一帶及びイベリア半島にかけての勢力――シチリアの確保――東部及び西部地中海における諸島の掌握――既に述べ來つた後を地圖の上に見るならば、回教圏の形成それ自體が同時に彼等の環海勢力圏となつてゐたことが領かれる。さりながら、西部地中海においては、遂に彼等も憾むべき缺點を遺すの已むなきに至つてゐる。即ち、前述の如く、ピレネーを越えた遠征軍がフランス攻略を果し得ず、退いてピレネー南部に踏み止つた結果、地中海に面するフランス沿岸が、常に彼等の環海圏構成の上に不滿足に堪へぬ缺點となつてゐたことは十分に領かれやう。

されば、西部地中海に關する限り、如何に彼等の海軍力が優位を保持したとは云へ、遂に「アラビア人の湖」とは呼び得なかつたわけである。とは云へ、このために彼等の活動が掣肘を受けたことはなく、イタリアの諸都市が他の都市との對抗上、進んでイスラームの勢力と結託した事實を觀れば、彼等はやはり地中海の一大勢力であつたことを窺ふに足るのである。

この事情は西部地中海における回教徒の行動に著しい特長を物語るものである。彼等は平和裡に南伊及び南佛との交渉を持つのみならず、更に進んでギリシヤ、東方レバントの間にも及び、東ロマとの關係においてさへも平和交渉を持つ機會を見られるのである。これは東地中海が、常に東ロマなる敵を持つために武力的鬪爭

を反復してゐたのに比して、正に對蹠的な動きであつた。而して、かゝる狀態を釀成せる理由の一として、貿易による相互の利益が莫大に上つてゐたといふことを考へないわけにはゆかぬであらう。卽ち、當時の回教徒のもたらした物品は、何れも西歐地區では珍品ばかりであつて、西歐諸港の商賈は之を內陸地方に賣り込んで利益を占めようとする態度が明らかに見受けられる。從つて、回教徒と事を構へる損失を極力避けようとしたことも頷かれるところである。

この現象は十字軍（一七五六年—一九三二年）の起る前において既に顯著であり、わけてもイタリアのアマルフィ及びヴェニス等の如きは、法皇への反逆を敢てしてまでも、交易の利益を擁護したほどである。

かくの如く西部地中海の貿易が繁榮するに從つて飛躍的の發展をなしたのは、シチリアの都バレルモであり、一時は東のバグダード、中央のカイロ、西のコルドヴァ——卽ち當時の回教圈の三大中心地と比肩するかと思はれるほどであつた。これはバレルモの支配者ユスフ（一六四九年—一六五八年）の統治宜しきを得たゝめであつて、されば、ユスフ歿するに及ぶやバレルモの繁榮は忽ちにして剝落し、やがてはピサの海軍に乘ぜらるゝ運命に到つてゐる。

第七章　印度洋通商の殷盛

I

アラビア人の印度洋における活躍は既に先史篇に述べたところであるが、一三六〇年頃に到ると、單にアラビア人としてゝはなく回教徒としての彼等の雄飛が注目せられる。而して略〻この時と同じく彼等の陸路よりする印度侵略が行はれてゐる。即ち、一三六二年カーシムに率ゐられてカイバル峠を越えて侵入してゐるのであるが、こゝに同じ回教徒でありながら、北方陸路よりするものは武力を用ゐてゐるに對し、南方海路よりするものは和平裡に事をすゝめてゐる事實を見過すことができない。

さて印度洋における回教徒の活動を刺戟したものは地中海貿易の隆昌に伴ふ西歐向け需要品の膨脹である。勿論、先史篇に述べた如く單なるアラビア人としての活動範圍を凌駕して、この時代にあつては、回教圏の世界的構成といふ宗教的機運が大いに動いてゐる。新航路を發見し、東方の珍品を入手せんとする意慾が、アラーの聖旗の下にといふ宗教的征服慾によつて、一層かきたてられたことは確かであつた。事實、回教圏が構成せらるゝにつれて、各地より朝貢せらるゝ物品には東方の事情に明かるい筈の彼等にも珍しいものが多かつた。然も一度び、かゝる物品を目擊するや彼等の野心は大きく動き、原産地へ原産地へと船を進めたのである。

從つて、彼等の海洋進出は、回教徒としての性格を一應認めるとするも、依然として商利を追求するが第一義であつて、宗教の傳播はそれに伴つたものであると考へて差支へなからう。即ち、交易のため一定場所に住居を構へることゝなつて自づから土着人との間にも通婚が行はれたのである。尤も、回教徒は異教徒との結婚を禁じてはゐるが、結婚を通じて改宗する場合が考へられ、更にその子を回教徒として養育する場合も併せ考へ得られる譯である。かくて彼等の宗教傳播は、通商によ

る平和傳道であつたと云ひ得られる。

スマトラ、ジャワ、ボルネオ等に回教が傳へられた經緯は今明らかでないが、一般に、ポルトガル人のこの方面への進出期よりも餘り古いことではないとせられてゐる。さりながら、これよりも遙かに古く回教商賈がこの方面と交易の交渉を持つてをつた事實と、これに伴ふ既述の如き宗教傳播を沒却することが出來ない。

かくの如き傳播事情を考慮すれば、東印度における現住の回教徒にして教祖ムハンマッドの名さへ知らず、且又、舊來の習慣を保持して純粹なる回教習俗に馴染まないと云はれる事情も自づから諒解せらるゝところである。

然るに回教徒の齎す珍品と云へば、肉荳蔻の如きは西歐各地ではその原產地さへも知らなかつた。されば、回教商賈によつて齎される之等の品物が、珍重せられたことは云ふまでもなく、その需要の增大が直ちに彼等の印度洋における活動に結びついて來る。勿論、この交易にあたつては、回教徒が直接に行うたこともあらうし、回教徒から他民族の手を經て賣り込まれたこともあるだらうが、その主要航路としては、

(1) 印度洋→紅海→アレキサンドリア→ヨーロッパ
(2) 印度洋→ペルシャ灣→チグリス遡航→バグダード

の二つを擧げることが出來る。前者は專ら西歐キリスト教圈への販路であり、後者は回教圈への販路である。

かくて地中海の貿易と關聯しつゝ、印度洋の交通が頻繁となるに從ひ、自づから回教徒の根據地點が多くなり、然もこれ等の根據地は、逐次東進の一途を辿つた。而してこの針路の向ふ所、遂に南支沿岸に達するに到るのである。

これ等の根據地の中でも、南洋方面における根據地は「カラー」と呼ばれた。これが宛も現代の昭南の如き活躍をなし、アラビア夜話のシンドバッドの冒險談にも觸れるところであるが、遺憾ながら今日その地點を明らかにせられない。或はマライ半島のマラッカ附近とされ、或はスマトラの東岸であるとも云はれる。いづれにもせよ、專門家の研究によつて明らかにされることを望んで止まない。

Ⅱ

われわれは此處までのところ、回教徒の東進のみを考へ來つたが、この場合、支那人船舶の西進といふことは考へられぬことなのであらうか。ジャンク（戎克）に身を托して南支那海を征服してゐたであらうことは想像し得るが、然もこの經緯を明らかにする文獻がない。わづかに印度に赴いた僧にして、海路本國と交通連絡を保つた者の記錄があるのみである。

さりながら、回教徒の記錄によれば、西紀九世紀の半ば頃、支那に行つたスラインマンの記事に「支那船の海上に泛ぶもの多し」としてゐるから、われわれの想像が許されるならば、やはり南支那海及び印度洋に出てゐたものとしてよいであらうか。それにしても、彼等の活躍と呼ぶに足るほどのことはなく、もとより回教徒の航海とは同日の談ではない。

回教徒の南海における活動を窺ふに、アラビア人が海路齎したる商品はスマトラの東南岸なるスリボジャ（三佛齊）（即ち唐代の室利佛逝）に集められたやうである。之について嶺外代答卷三に「諸蕃水道の要衝なり、東は闍婆諸國あり、西は大食、故臨諸國、その境によりずして中國に入るものなし」とあり、諸蕃誌には「遂に諸國のものを截斷して其の國に聚め以て蕃舶の貿易を……」と說かれてゐる點から見ても、これがアラビア人進出の一基地であつたことは明らかである。五代會要卷三〇に「衣服制度は大略大食國と同じ」となし、宋會要蠻夷に「其の風俗衣服、大食國と相類す」とあるによつても、アラビア人が縱令然らずとなすも、恐らくはその風習の影響下にあるものと見てよい。殊に諸蕃誌の傳へる「右手を淨と爲し、左手を穢となし、雜肉羹を取りて飯と共に相和し、右手を用ひて之を食ふ」とあるは全く如上の感を深くするものである。（註）

かくの如く回教徒の南海進出は目覺しかつた。而して支那人の海上活躍を全く抹消する譯ではないが、之はアラビア人の渡來に刺戟されたものに止るのである。然

（註）アラビアの地圖は南を上にすることは後述する。

も支那そのものが唐朝と宋朝とを比較しても、その國礎に大いなる差のあることは、既に秋山謙藏氏の「日支交渉史研究」において指摘されてゐるところである。

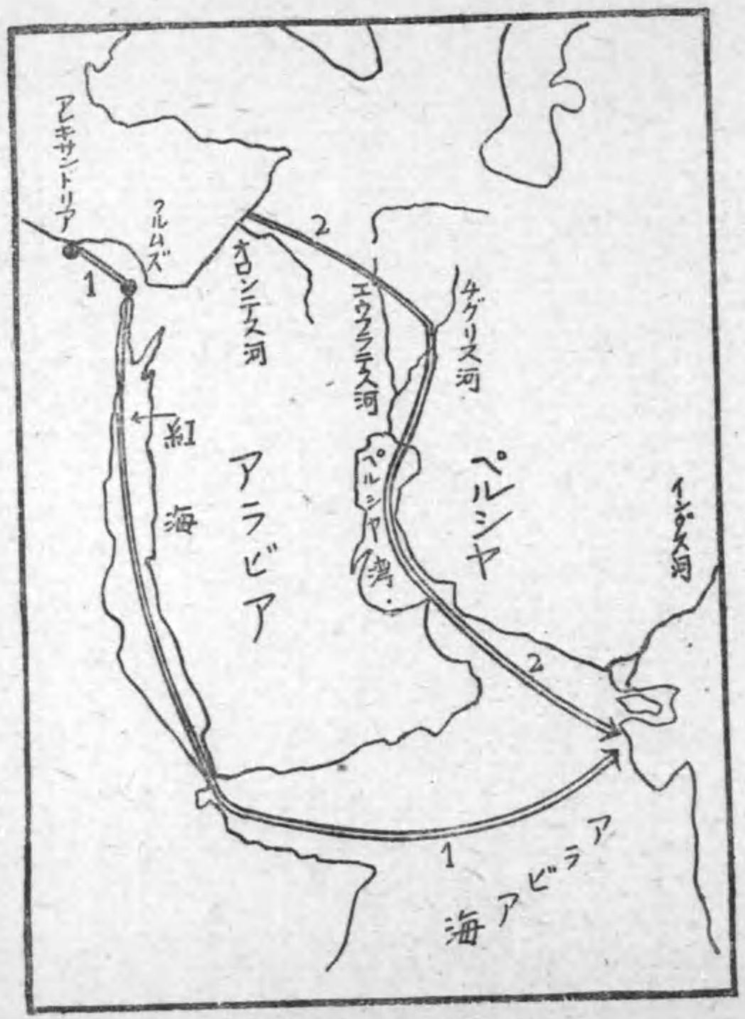
回教徒の地理學者フルダード・ビー（一五七二年歿）は、右、支那人の外に猶太人の活躍を指摘してゐる。而してユダヤ人が印度洋に進み出た順路として、次の如き二つの場合を擧げてゐる。

(1) 地中海→アレキサンドリア→スエズ地峽→クルズム（こゝより船出）→印度洋

(2) 陸路オロンテス河口に達し→シリア→エウフラティス（こゝより運河を利用して）→チグリス→インダス河口

さりながら、右二路共に、既に回教徒の利用したところであつて、ユダヤ人による新しき開拓ではない。

さて、印度洋を思ふがまゝに航行し、南支那との交通も開けるに到つて、貿易品も自づから多分に東洋的色彩を帶びることゝなる。例へば、



第一〇圖　ユダヤ人の東進路

芦薈、麝香、樟腦、肉桂、龍涎香、眞珠

これ等は特に珍重せられたものである。

中には支那の陶器を傳へた者もある。元來支那の製陶法は蒙古人のアジア征服の際にペルシャに傳へられたものとされてゐるが、それより約一世紀を經て、アジア横斷で名を馳せたイブン・バトゥータは、「印度及びシリア方面にまで傳播せられ、ジッダ（メッカの外港）においては、この種の陶器は珍しくない」と云ひ、更に、「アデンにおいては價格統制のために輸入を制限してゐた」と示してをる。

この記述を全部信用してよいか否かは、多分に疑點あるがゆゑに躊躇せざるを得ないが、エジプトの支配者達の間では、之を外交上の贈物に利用したといふ記錄によれば、やはり相當珍重品扱ひを受けてゐたことが窺知できるのである。殊に支那貨物と呼んで、陶器を意味して支那を代表せしめてゐる點より考へても、支那陶器の地位は十分に考へられると信ずる。

後の記事であるがマルコ・ポーロ（一九三一年―一九五五年旅行）の記事にも、

泉州に向ふ船舶が百隻以上で世界無二の最大良港とし（ユールの「マルコ・ポーロ旅行記」二の二、二三五頁）、イブン・バッータ（一九六四年―二〇三八年）は支那商船を三種即ち Junk, Jaw, Kakam となし、「大なるは千人の船員（兵士四百人を含む）があり、大船の内部は藥草生薑が栽培され、木造の家屋があり、いはゞ獨立した大都市の如きもので、この種の船を有する支那人こそは世界で最も富める民である」と說いてゐる（サムエルの「イブン・バッータの旅行記」一七一―二頁）のによつても略ゞ想像されるところであらう。

第八章　支那回教勢力の樹立

I

舊唐書の西域傳によると、

「永徽二年　大食王　噉密莫未膩（エミール・ムーミニン）初めて使を遣して朝貢す。自から曰、王は大食氏、國を有すること三四年、二世を傳ふ……」

とある。さりながら永徽二年と云へば一三一一年（回暦一二一年）に當り、それより三四年前は卽ち一二七七年であつて大食建國（註）の一二八〇年と比較するとこゝに三年の相違を生ずる。さりながら「エミール・ムーミニン」とは「信者の指揮者」

〔註〕大食（ターヂ）は、ペルシヤ語の「ターバン」の轉訛と云はれ、又、アラビア語の「タージル」の轉訛とも云はれる。因みに「タージル」は商人の意である。

を指してをり決して個人名ではない。これによれば如何にも正使らしくあるが之は甚だ疑はしい。この事情より思ふに、正使たる者が自國建國よりの閲年を誤算する筈はないし、且、その時の貢物が璃瑁の如き南海の産物であるから、恐らくは海上雄飛の冒險兒が使者を僭稱したものではなからうか。然し、いづれにしても回教徒たることには間違ひはない。

さて、印度洋を次第に東北進していつた回教徒が、やがて南支那に達することゝなつたのは前章に述べたところであるが、回教徒の中心地は、廣州、泉州、揚州などにあつた。而して、回教徒は交易を唯一の目的となしてゐたが、支那官憲は之を朝貢と見做し、中央政府へも亦かくの如く報告してゐる。然しながら、朝貢者をしてそのまゝ歸らせるに忍びず、再度の朝貢を期待して支那の物資を提供した。

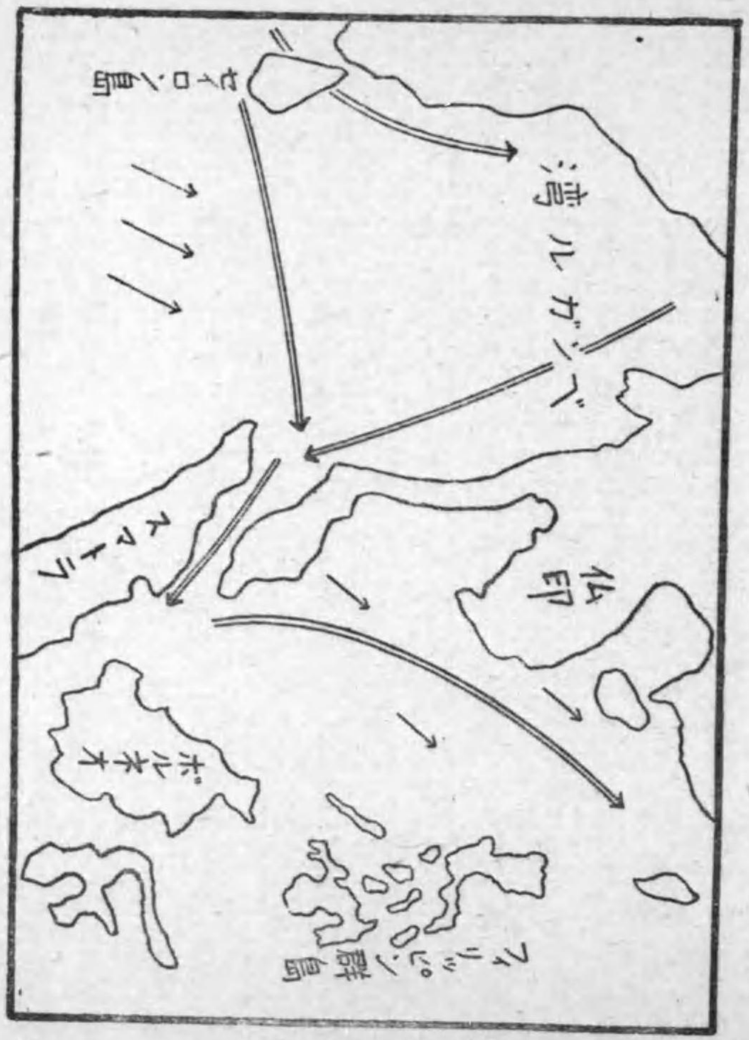
かくて唐朝時代において、朝貢の形式を以て對支貿易の途が開かれたのである。そして、その往復が頻繁となるに從つて、港市に居を構へる回教徒が增加するに到つたのは自然の歸趨であり、こゝに後代呼ばれるところの租界の濫觴への動向が生

れるに到つた。之を「藩坊」又は「番坊」と呼ぶ。而して「番坊」には居留民中より「番長」が任命せられ、「番坊」の事を一任せられた。またこの外に「提舉市舶」「市舶司」なるものが設けられた。「市舶司」は、外國商船との交渉の任に當り、禁製品の點檢、專賣品の買ひ取り、關稅徵收、外國商人の保護等を掌る。而して唐朝の時代を通じては支那地方官吏が之を兼任した。

かくの如く、南支の重要諸港に回教徒の居留地が設定せられ、稅關制度また制定せらるゝに到つて、對支貿易が活況を帶びたことは、然かあるべきであつて、今や南海貿易が回教徒に獨占されつゝ、同時に回教文化東進を促進するのである。

Ⅱ

宋史「大食傳」によると、宋の太宗が回教徒に向つて「アラビアには何を產するや」といふ質問を發してをり、之に對して回教徒は、香料、象牙、犀角などを擧げてゐる。然しながら、之等の物產はあながちにアラビアの特產品とは云ひ難く、む



第二圖　回教徒の南支那海進出圖

しろモルッカの物産を簡易に持ち來りながら之を僞つてゐるものと思はれる。

記錄によれば、宋朝時代には回教徒の來航は愈々繁く、

開寶元年（一六二八年）同四年、同七年、同九年

大平興國二年（一六三七年）同四年

とある。

一體、この時代回教商賈が本國と支那との來往のために普通二ヶ年を費したといはれる。尤も、イブン・コルダードベー及び唐の賈耽の廣州通海夷道（新唐書卷四三下）には總計約九十日としてゐるが、之は順風航海を標準とし、且、寄港日數を省略してゐる。しかも玆に注意すべきことは、マスウーディの記事にも知られる通り、一五四〇年乃至一六一〇年頃、即ち支那の唐末五代の頃は回教徒にして支那船に便乘した者多く、更に宋より元にかけて益々これが甚しいといふ事である。

要するに、唐→宋→元と、次第に支那における回教商賈の勢力が强大になつたのであつて、淳化四年（一六五三年）に渡來せる保希密（ホキミツ）は「謹みて錦旗を献上する」と申し出で、その經濟的背景にはなかなか侮り難い勢力があつた。而して宋朝においては、市舶司を任命するに回教徒を以てし、概ね番長がこの任に當つた。回教徒市舶司は大いに成績を擧げ、朝廷では之を賞してゐる。例へば、南宋の高宗の紹興七年（一七九七年）には、「國家の財政を救けること頗る大なり」と云うてゐるほどである。

當時、最も殷賑を極めた所は廣州（廣東）であつて、此處に取引される乳香の高は、廣州の三四八六斤に對して、杭州は六三七斤に過ぎない。

これによれば概ね當時の貿易の樣子を知り得られやうが、然も之等の商品を通じて朝廷の收入となる關稅も亦莫大なる金額に上つたと見てよい。先に云つた保希密の子、保甲陀（ホコーダ）、保阿里（ホアリ）等はいづれも市舶司となり、宋朝より番客の扱ひを受ける上意を受けてをる。

かくの如く回教市舶司は、何れも宋朝の經濟を救けること大であつたが、宋末に至つて時の朝廷は頻りに積極的經濟援助を市舶司蒲壽庚（ホシウコー）に申し出てゐる。蒲壽庚は

彼の父の蒲開宗の頃に廣州から泉州に移住したが、偶々南海に出沒する海賊がこの地を襲ふのを兄の蒲壽宬と共に當局を援助してこれを擊攘した功などもあり、泉州の市舶司として蕃舶の利を擅にすること三十年と云はれるほど利益を壟斷した。而して南宋の末には福建安桂沿岸都制置使に進み市舶司をも兼ねてゐた。彼の擁する富力の大、改めて云ふまでもないことである。この當時の宋は既に衰微の域に達してをり、加ふるに北方よりする元の壓迫に堪へかねてゐたゝめ景炎帝は蒲壽庚に期待するところ非常に多かつた。然るに元も亦彼の勢力を知つて至元十三年（一九三六年）二月、元の將軍伯顏は特使を派遣して彼に降を奬めてをり、彼の態度なほ何れとも明らかならざるに宋軍は彼の船舶その他の物資を徵發するの暴擧に出づるに至つたので、彼は宋朝への期待の一切を擲つて元軍に味方した。もとよりその優力なる海上勢力が、元軍の使用に供せらるゝに至つたことは云ふまでもない。

この結果、元は彼の助力を蒙ること頗る多く、やがて景炎帝は廣東方面に逃れ、次いで宋の遺孽が哀史の跡を止めて滅亡することゝなつたのである。

元來、元は北方蒙古人であつて、それが文化の異る南方支那を經營するは容易ならざる業であつたに違ひないが、然も之を完遂し得た陰には、多分に回教徒の活動のあつたことを考へてよいであらう。

參考文獻

桑原隲藏　蒲壽庚の事蹟
藤田豐八　東西交涉史の研究（南海篇）
秋山謙藏　日支交涉史研究
岩村忍　十三世紀東西交涉史序說

第九章　元と回教徒

I

アジアの廣域を悉くその馬蹄にかけ、長驅西歐にまで侵入した元軍も、日本の攻擊については相當の準備をなした。然も元軍内部にあつては、この擧に對して賛否兩論が沸いた。日本討つべしとするものは專らその富を說き、之に反するものは、日本人は勇敢にして死を恐れない侮り難き强敵である上に國土狹小之に大擧遠征するは恰も大海に石を投ずるに等しい、と云つた。

何れにしても日本の情況に關しては、高麗がその諜報をもたらしてゐたであらうことは想像に難くないが、こゝに看過し得ないのは南支那の態度である。既に唐朝以來、南海貿易に從事した南支人は、造船、航海の分野において獨自の立場を占めてをり、然れば如何に元朝とても、海戰の必要ある時は專ら南支の活動に俟たねばならぬ事情を見拔いてゐたからである。その上、彼等は之に隨伴する利益を忘れてはゐなかつたであらう。造船による利、軍需品の運搬による利等を考へれば、彼等こそ日本遠征に賛成した第一人者ではなかつたらうか。

さて元朝は一九二八年（至元五年）に高麗を通して國書を捧呈し來つた。もとより日本は之を受け付けず、その使ひを追ひ返した。この時の使者の中に回教徒が居つたか否かに關しては、明らかになし得ないまでも、元軍の遠征準備中に、われわれは回教徒の活躍を見逃し得ない。

至元八年（一九三一年、文永の役に先立つこと三年）元の世宗は砲を造る技術者を募集してゐるが、之に應募した者の中に、阿老瓦丁（アローチヤヰン）及び亦思馬因（イスマイル）の二名の回教徒と覺しき者が見られる。欽定元史によれば、この二人の應募の樣子を敍するに、「家を擧げて驛に馳せ、京師に至る……」とあり、元朝また之を優遇した。而して右二名は單に造砲の技術者たるばかりでなく、砲術にも長じた者であつた。

殊に亦思馬因は宋軍の據る襄陽攻擊に當つては大いに功を樹てた。記錄によれば亦思馬因は「一五〇斤の彈を放ち、天地爲めに震ひ、深さ七尺も地中に入つた…」とあり、更に宋軍が船を以て逃げ出すや之を對岸より狙ひ擊つて悉く沈沒せしめた——とある。亦思馬因使ふところの回々砲は、ともかくも大なる威力を示したらしい。これ等の勳功によつて彼は重用せられ、彼の歿後はその子布伯が後を繼いだ。

かくの如く、元軍は西域人の教導の下に、造砲に意を用ゐ、又砲術訓練にも餘念がなかつたのである。從つて、日本襲來に際しては、之等の砲——所謂「回々砲」が利用せられたことは疑ひのないところである。

それでは「回々砲」とは如何なる砲であつたらうか。單に石を飛ばす程度のものであるか、或は又、今日の火器に擬すべきほどのものであるか、之は容易に何れとも定め得られないが、なほ少しく考證を試みたい。

霹靂砲と呼ばれるものがある。之は紙製のはりぬきであつて、中に石灰と硫黃とをつめて投ずる。すると水中にて自然發火の作用が起り、紙が破け石灰四散して人馬を傷けるといふのである。これは、かなり古くからあるらしく、素より之を以て火器と呼ぶことは出來ない。元軍の用ゐたものは之と違つてゐる。

明史の兵志によれば、「古來いふ砲は皆石を發するが、元が西域砲を用ゐて始めて火を發するに至る」とあるから、前記の霹靂砲とは趣きを異にしてゐるやうである。

蒙古來襲の古圖によれば、鐵丸の飛來する圖あり、火箭發射の圖あり、之を以てすれば單なる弩機であつたとは考へられぬ。

明代に至れば佛郎機（フランキ）砲と稱するあり、之は明らかに砲彈を飛ばしてゐるが、元代においては砲彈のことは考へる譯にいかぬから、單に、鐵丸を發射したのではなからうか。鐵丸發射に際して發火し、轟音生じ、敵の膽を奪つたのであつて、鐵丸それ自體に爆發性は認められないであらう。

さて、萬端の用意を整へた元軍は文永十一年十月に來寇したが、神風に遭ひ散々の敗北を喫するに到つた。

Ⅱ

建治元年四月十五日、[註]再度の元使五名が長門に來た。鎌倉幕府は八月に之を關東に召し、執權時宗の果斷を以て九月七日、龍ノ口に斬つた。

この時の使者の顏振れは注目に値する。

杜世忠（禮部侍郎）	三四歳	蒙古人（大元人）	
何文著（兵部中郎）	三八歳	漢人（虞人）	
撒都魯丁（承司郎）	三二歳	回教徒（回々國人）	
果（書狀官）	三二歳	ウイグル人	
徐贊（通譯）	三三歳	高麗人	

これを見ると、先づ各民族が各々一人宛配されてゐることに氣付く。之は一體、何の目的によるものか、その說明は施されてゐないが、使節であると同時に、日本の國情を探知せんとしてゐたことは想像に難くない。然も、われわれの特に注意したいことは、回教徒の存在であるが、彼が特に、我が海防、兵事を探るの一任を帶びてゐたといふことが考へられるならば、海事に明かるい回教徒が選ばれてゐることもあながち理由なしとはしない。

〔註〕建治元年は皇紀一九三五年、至元一二年に當り、文永の役より一年後に當る。

こゝに到つて元は再度遠征の準備を進めた。世祖の至元一六年二月、揚州、湖南、贛州、泉州の四省に命じて兵船六〇〇隻の建造を命じてゐる。泉州と云ひ、揚州と云ひ、何れも唐代よりの回教徒の根據地であり、南支における海軍の要衝であつたことは改めて云ふまでもなからう。

右、造船準備と共に、元は鋭意、日本の諜報を集めるに力を効してゐる。勿論、これには高麗人を動かしてゐるが、同時に「近海に怪しい船の近づくあり……」と見える當時の日本の記錄によれば、單に高麗人のみならず、南支方面の回教徒を動かしてゐたことも領かれやう。

元がかく牒報の蒐集に努力する一方、日本側においても怠りはなかつた。既にして元軍の再度來襲を知つてゐたので、太宰府に命じて專ら北九州における海防を嚴にせしめ、又同時に元の樣子をも窺はしめてゐる。建治三年六月八日の太宰府の奏上には、

「今春我が船宋に至る。その國亡ぶと聞き貿易せずして歸る……」

とあり、この年は至元一四年に當り、元史日本傳の同年の項には、

「日本商人を遣はし、金を持ち來り銅錢に代へんとす、之を許す」

と記してをる。之等の事情より按ずるに、日本の船舶も長驅南方支那にまで到つて、その事情を探つてゐたことが察せられる。

さて、元の遠征準備は着々と進み、建治三年十二月に、洪茶丘をして征東都元帥となし、高麗との連絡を頻繁に行うた。然も弘安元年（至元十五年）七月には、高麗王、早く事を決せんことを元朝に訴へてをるに對し、同年十一月には宣慰使を揚州におき、專ら我が國商船の取り調べを行はしめてゐるが、右宣慰使には回教徒の阿剌罕を起用してゐるところを見れば、元は當に高麗と通ずるのみを以て足れりとせず、南支の力にも等しく依存してゐた事情を知り得やう。

至元十七年（弘安三年）征日本行省を設置し、直ちに兵船三〇〇〇隻の建造を命じてゐる。

かくて弘安四年五月二十一日、壹岐對馬に來り、六月五日（鹿島志賀島のこと）に來り、七月二日、神風に遭うて再び敗退する。さりながら、六月五日より七月二日に至るまでの陸戰においては、回々砲は再び日本軍を惱ました。

西域諸國への攻略は破竹の勢ひを以てした元軍であつたが、日本には遂に二度の大敗を嘗めた。然も、之を以てなほ斷念せず、やがて第三回遠征の準備を始めた。至元二十年夏、回々砲製造者を募り、更に同二十二年には回々砲手五十人を獲、二十二年十一月は、征日本戰士萬人の募集を行うてゐる。さりながら、この頃より元

と安南との交渉が始り、之が事急を告げるに到つて、遂に日本遠征の計畫は消滅した。

Ⅲ

以上にて略〻明らかなる如く、元の南支經營には回教徒が不可分の關係にあり、元は回教徒の海上勢力なるものを十分認めてゐたと知るべきである。

從つて元の海上遠征における場合には、その裏に表に回教徒の活動は沒することが出來ない。日本遠征の場合のみならず、忽必烈(フビライ)のジャワ遠征に當つても、回教徒の水先案内としての働きは充分に考へられるところである。然も、年數を經て在支回教徒の勢力が增大するにつれて、彼等の西域知識が支那人の間に傳へられたことは覆ふべくもない。

嶺外代答(南宋孝宗の淳熙年間一八三四年—一八四九年。廣西省の周去非の著述)には、アラビア、エジプトの事情をも傳へてゐる。

諸蕃史(南宋理宗の寶慶元年—一八八五年—福建省の貿易商人趙汝廷の著述)には、回教徒の印度洋における目覺しい活動を紹介してゐる。

下つて明代に到ると、永樂帝が數回にわたつて西方に示威運動を試みてをり、鄭和をしてペルシャよりアラビアを經てアフリカへの航海をなさしめてゐるが、この場合の水先案内は勿論、回教徒であつたことは疑ひのないところである。然も、これは永樂帝の示威運動であつたとは云へ、この船の赴くところが回教圏内であり、回教徒水先案内は逆に回教文化の隆昌を支那人に宣傳するの結果を招致してをることも考へられやう。

永樂十一年(二〇七四年)六三隻の大船團に二七〇〇人を乘り組ませて派遣した。この行には、回教徒、馬歡之に加はつて、「瀛涯勝覽」を著してをり、前後四回とも參加した回教徒、費信は「星槎勝覽」を書いてゐる。

印度、マライ半島乃至は支那にしても、これ等の地には固有の宗教が根強い力を持つてゐたがゆゑに、西南アジア或は北阿におけるが如く回教の傳播は容易でなかつた。尤も彼等の熱意によつて、回教徒は大いに增加してゐるにしても、本來固有の宗教が混入してゐるため、純粹なる回教の姿は認め難い。

思ふに印度洋の地理的條件は、地中海とは全くその趣きを異にし、シチリア島の如き存在も見られないし、四方を陸に圍繞されることもないし、加ふるに國際關係における限り、この時代は極めて平明であつた。印度洋にあるものは、唯、尨大なる印度の存在であり、之が突出して、西はアラビア海と東はベンガル灣とに分けるに過ぎず、南は大洋に向つて開放せられてゐる。

かゝる狀態ゆゑに、印度が回教に好意を持つ限り、印度洋における回教徒の自由な行動が許され、何の掣肘をも受けることなく、東への途を辿り得たのである。而して遂に支那大陸と結び付くに到つて、回教徒の印度洋は正しく黃金時代を現出したのであつたが、やがてトルコの興隆によつて西歐諸國がいよいよ東方貿易を壓迫さるゝに及び、自然の勢ひとして歐人の新航路發見となり、印度洋は西歐人にとつて代へられることゝなるわけである。

參考文獻

松井等「支那の砲と拋石」東洋學報第一卷
石田幹之助、「文永役に蒙古軍の使用せる鐵炮に就て」同右第七卷・第八卷
矢野仁一「支那に於ける近世火器の傳來について」史林第二卷三號・四號

隆替篇

第一章　ヴェニスと回教徒

I

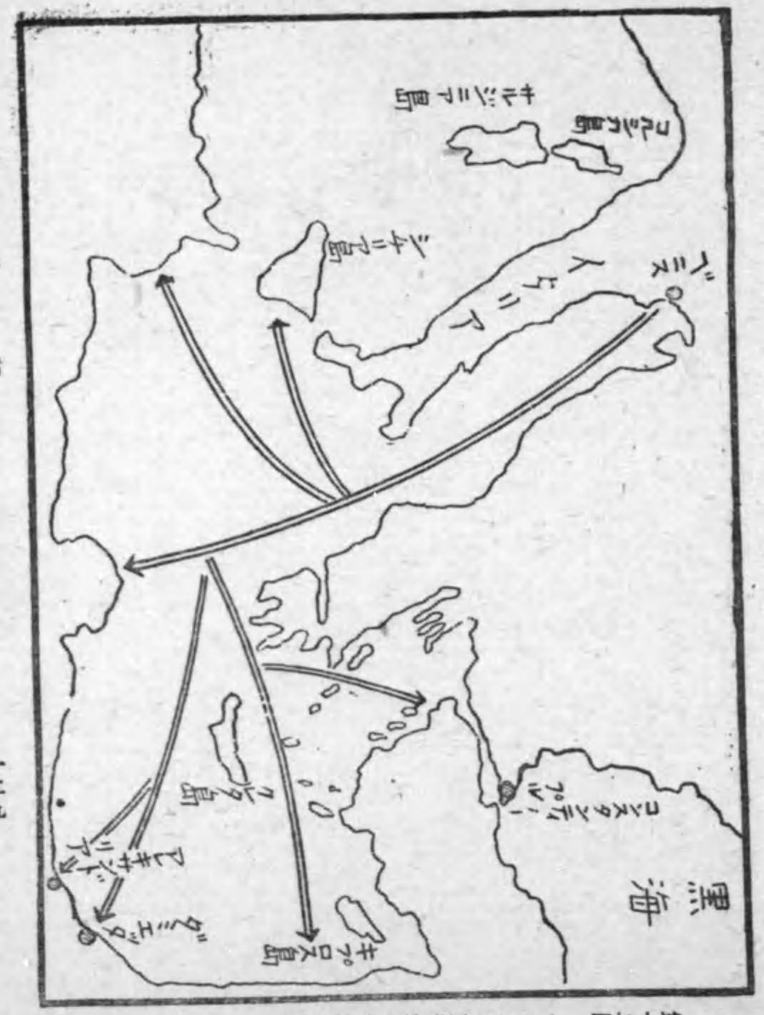
回教徒とキリスト教徒との交渉が單に干戈の中に進められるばかりでなく、屢々平和の裡にすゝめられた事情については先に觸れたところであるが、中にも對ヴェニス關係にあつては之が特に顯著であり、まことに

「戰さの神と共に商業の神」

「商人先に進んで國旗之につづく」

と云はれるまゝを證明してゐる。

元來ヴェニスはアドリア海の奥に位し、回教軍が盛んに地中海の制壓を行うた折も先づ脅かされることなく、從つて回教徒と干戈の間に恨みを構へることもなかつ



第二二圖　ヴェニスの海外貿易及海外進出

た。これは地中海の他のキリスト教國の場合とは、全くその趣きを異にするところであつて、かゝる事情の下に、回教徒と特殊な交渉を結ぶのである。

尤もシチリア攻防戰においては、東ロマの要請に應じて、しばしば船艦を出してゐるとは云へ、之は回教徒に代つて東方貿易を獨占しようとする意圖に基くことであり、東ロマと回教軍との抗爭を巧みに利用したものであつた。ともかくも、ヴェニスにとつては、回教徒——この場合は殊にエジプトの回教徒——は良き交易相手でこそあれ、軍事上の敵ではなかつた。

回教徒の史家、イブン・カルドゥーンも、

一、ヴェニスの位置が安全であること

一、從つて回教徒と有利な通商をしたこと

一、然もヴェニスは回教徒に盲目的な怨恨を持つてゐないこと

右三項を擧げて、兩者の交渉を說いてゐる。

さりながら、ヴェニスのこの行動は、ロマ法皇に決して好印象を與へてゐない。

一四七四年と一四八〇年の二回に亙つて、法皇はシリヤ及びエジプトの回教徒との取引を嚴に禁じてゐるが、ヴェニスは之を無視して依然として交渉を斷つに到らなかつた。ヴェニスは回教側へ、ダルマチアの海岸よりスラヴ人の奴隸と船材とを提供し、回教徒はヴェニス側に、香料、絹、麻、珊瑚等を送つた。

こゝにおいて遂に法皇は破門を宣告するとまで叱責したが何の効果も見られなかつた。兩者の交易は益々深くなり、時にあつては、ヴェニスは通商の誼みを以てバレスタイン、特にエルサレムに赴く修道僧を回教徒に紹介する便を與へることさへもあつた。これ等の事を考へると、ヴェニスは宗教的の抗爭といふことは些かも顧慮せず、飽くまでも商業的の交渉に終始してゐたやうに見受けられる。

されば、法皇の忠告或は警告は馬耳東風と聞き流された。彼等の前には交易による巨利と、それに伴ふ勢力の増大とが何よりも大きな魅力であつた。

然し、東ロマは何故にヴェニスのこの專横なる態度を默過したのであらうか。それは一に、少くとも東地中海にあつては、ヴェニスの海軍に依存してゐたがゆゑで

ある。しかし、ヴェニスの海軍は交易の發展とゝもに、充實し膨脹してゐたのである。そして、ヴェニスの海軍の充實は、回教軍と戰ひを交へることなく、徐々に回教海軍を壓迫し、巧みに東地中海における海上實權を掌握するに至つた。

Ⅱ

キリスト教徒にとつて他に求めることの出來ぬ聖地エルサレムは、一二九八年に回教軍に奪取されてゐる。謂はゞ、信仰的に絶對の地を、異教徒の手中に委ねたのである。されば、この地を奪還せんとする念願が常にその胸裡にあり、之が機を得て遂に勃發し、十字軍の進攻を見るに到つたことは當然の結果であらう。而して、十字軍はロマ法皇ウルバヌス二世（一七四八年―一七五九年）を主唱者とし、一七五六年より爾來斷續して一九三二年にかけて行はれたのである。

十字軍の經緯を詳述するは本書の目的とするところでないから之を省略するが、然も十字軍は單に、(1)エルサレム奪回戰といふよりも、(2)回教徒と東ロマ帝國とのオリエントの爭覇戰であり、他面、(3)回教徒の西歐進出に對する阻止工作であるとともに、(4)コンスタンティノーブル教會壓迫の企圖をも持ち、更に(5)ヨーロッパの經濟的東方進出を企畫せるものであつたことは誰しも等しく認めるところである。

右、五項目の中、第四項の一を除けば、他は全て回教徒との關係において成立する事柄であるが、本書にあつては、直接之等に觸れることなく、海事問題に關して記述をすゝめることにしたい。

さて、回教徒に對してキリスト教團は積極的進攻態勢をとるに到つたが、この場合、大軍の輸送を可能ならしめた所以のものは、

一、回教軍の海上勢力が既にヴェニス海軍に壓倒されてゐたこと

一、地中海における最大の海軍國ヴェニスがこの輸送について巨利を獨占する立場にあつたこと

右二點にあることは否めないであらう。

第一回十字軍に當つて、ヴェニスの支配者、ヴィタレ・ミカエルは兵船二〇〇隻

を以て進發し、先づロード島に渡り、こゝに同じく十字軍への參加のために集結してをつたピサの艦隊を襲つてその二〇隻を掠め奪ひ、スミルナを侵して後、ジャッファに來つて初めて十字軍に加はつた。

この行動においても、ヴェニスは明らかに反教的態度を示してをり、且又、對回教關係にあつては、依然として利敵行動を改めるところがなかつた。ヴェニスにとつては、全ての場合、商業が先づ第一義であつたのである。

一八三六年三月、法皇アレキサンダー三世はラテラン會議を開き、キリスト教徒にして回教徒を利する行爲を堅く禁じたが、こゝに到つても尙且、ヴェニスの船にして回教船を誘導するが如き利敵行爲を敢てして憚らぬものが見られた。

ヴェニスの行動が既述の如く、商利第一主義に動いた結果、軍隊輸送の實權を握つてゐた彼は、この立場においても亦利を占めることを忘れなかつたがゆゑに、本來神聖なるべき十字軍さへも、遂にヴェニスの利に左右されるが如き醜態を露呈するに到つた。

即ち、第四回十字軍は、法皇權がその最高に達してゐたと云はれるインノセント三世（一八五八年—一八七六年）の時代に行はれたにも拘らず、十字軍の一七六年に亙る戰歷中、最も見苦しき行動を演じてゐるなどは、この間の消息を最もよく語るものであらう。

Ⅲ

一八六二年七月、第四回十字軍は四萬の大軍をヴェニスに集結した。その意圖するところは、「バレスチナを徹底的に破るためには、その背後のエジプトを衝くべし」といふことである。正に、クリート島を奪回せんとした東ロマが、却つてエジプトを襲擊したのと軌を一にするものである。

この計畫が決定するや、十字軍は四萬人の軍隊輸送を擧げてヴェニスに依賴した。之に對してヴェニスは八五〇〇〇マークを請求したが、時の十字軍は五四〇〇〇マークしか負擔し得ないので、この交渉は容易に成立せず、四萬の大軍荏苒日を空し

うして却つて軍費を浪費した。

ヴェニスにしてみれば、穀倉エジプトを獲れば軍費を得るに難からぬことを十分知つてゐたが、然し、一時の軍費を得るために將來の交易の利を失ふは忍び得ざるところであり、この理由の下にヴェニスはエジプト征討を最も喜ばなかつたのである。

この窮地を展開すべくヴェニスは一策を案じた。即ち、ハンガリア人に奪取されたザラの恢復を十字軍に要求し、その代償を以てエジプト向け輸送を行はうといふのである。これについては、ロマ法皇の代表者も、亦法皇も極力反對したが及ばず、ザラの攻略は四日間にして成就した。かくして愈々ヴェニスは輸送の約束を果すべき時を迎へたのであるが、尙、彼は逡巡した。

恰もこの時、東ロマに政變起り、アレキシゥスがロマ法皇の下に逃れ來つて救ひを求めた。法皇は之を容れたが、コンスタンティノーブル教會をロマ教會に合併し、ロマ法皇が東西教會を統轄することを條件となした。

ヴェニスはこの變の利用を以て、第二の回避策とした。即ち、支配者ダンドロ、アレキシゥスを救けることを目下の急なりと云ひ、更には、既に冬季を迎へて海上輸送の困難なる事情を說き、徒らにヴェニスに冬籠りするよりは出でてコンスタンティノーブルを討てば翌年のエジプト遠征の軍費が獲得できるとて、遂に十字軍をしてコンスタンティノーブルに向はしめた。

こゝに到つて十字軍は明らかに東西兩教會の抗爭の具に供されることゝなつてゐるが、然も事こゝに導いたのは、一にヴェニスの態度であつた。矛盾を介せず反宗教的態度に捉れず、「商賣の神とともに」行動したのである。かくして、ヴェニスは日を追うて强大となり、着々と東地中海における實權を確保していつた。回教徒は遂に、戈を交へずしてヴェニスに壓迫されるに立ち到つたのである。

當時のアレキサンドリアには三〇〇〇の白人を算したが、その大部分はヴェニス商人であつたし、十字軍の刺戟を受けてヨーロッパの東方貿易いよいよ盛んとなつた結果、カイロはヨーロッパにも稀なる大都市を現出し、この都に使役する駄獸は

三〇〇〇〇頭を數へ、ナイルの航行船は三六〇〇〇隻に及んだと云ふ。

而してヴェニスは通商保護のために、常備海兵を一〇〇〇〇〇以上擁し、商船は一〇〇頓乃至二〇〇頓級のものを三〇〇〇隻、之に從ふ水夫二五〇〇〇に達したと稱される。以て、ヴェニスの繁榮を知るべきである。

さりながら、餘りにも利益を追ふに餘念なきため、次第に武備を怠り兵員また傭兵を以て滿足した結果、二〇一一年ゼノアの海軍と戰うて敗れ、二〇一四年のアルゲイロの海戰、二〇三八年のアンティウムの海戰に敗れるや、遂に衰頽の途を辿るに到つた。尤も、之等の海戰の前にオスマン・トルコの興起あり、東方の貿易は之に壓迫せられて、昔日の繁榮を失うてゐた事情も考へねばならない。

第二章　ノルマンの南下

I

回教軍が東西地中海の制壓に努力を傾注してゐる時、一五〇四年に早くもノルマンはポルトガルのリスボン沖にその姿を現し、その翌年一五〇五年にはゼビラに進攻した。ゼビラは直ちに休戰條約を結んだが、イスパニアにおけるノルマンは容易に退却しなかつた。

當時、イスパニアにおける回教勢力は、その最盛期に達してをり、アブド・ウル・ラフマーン三世はノルマンと親善關係を結び、時には使節を遣り、彼の船を入手しては自船の改造を行ふなど彼を利用するに賢明であつた。かくてアル・ハカム二世（一六二一年―一六三六年）の時代に到つて殆ど彼の造船術を學び得て、或る

程度の船艦改造をなすことが出來た。

さりながらイスパニアに於ける回教徒がその後衰微するに反して、ノルマンは却つて力を增大し、西部地中海における回教的勢力を奪ふに到つた。

この事情はロマ法皇にとつてみれば、この上なき幸せであり、自から手を下すことなくして回教徒を一掃し得るを德として、專らノルマンの活動を保護した。この結果、南部イタリアの都市及びシチリアがノルマンの手に歸するや、メッシナ海峽が漸くキリスト教徒側に解放せらるゝことゝなつて、十字軍の輸送に大いなる利益をもたらしてゐる。

ノルマンが地中海にその勢力を謳歌したのは、英主ロージャー二世（一七五三年―一八一四年）の時代である。彼は、南イタリアとシチリアとを併合し、法皇、アナクレゥス二世の允許を得てシチリア王となり、バレルモに都した。既述せる如く、シチリアは回教軍が百餘年に亙る長期戰の結果、取得したもので、シチリアを得て初めて地中海の活動を本格的ならしめたのであるが、今や之をノルマンの手中に委ねることゝなつては、その海上勢力の衰運は覆ふべくもない。東部地中海がヴェニスにとつて代られると共に、西部地中海はノルマンの興隆に之を委ねることゝなつたのである。

ノルマンの地中海における本據はシチリアであつた。素よりその治下に回教徒の活動がある程度許されたには違ひなく、東方よりの寶石類、印度の鐵製品、染料、香料、支那の陶磁器、絹製品、エジプトの綿製品、ペルシャ及びトルコの絨緞、皮革製品等の集散地となつたが、これは大體において回教徒の先蹤によるか、彼等の協力を俟つ所尠くなかつた。また首都バレルモにて盛んに製られた金銀細工、硝子細工等も優にヴェニスの技術に對抗し得たのは、全く回教徒の力によると云ふべきである。

右の次第によつても察せらるゝ如く、ノルマンは回教徒を一概に敵として排斥せず、寧ろ之を巧みに利用したのである。殊にロージャー二世は度量大きく賢明に回教徒を自からの用に使つた。その最も顯著な例は、回教地理學者イド・リシーの起

用であらう。

イド・リシーは一七五九年セウタに生れ、一八二四年頃に歿してゐる。彼がロージャー二世のパレルモの宮廷に仕へ始めた年は明らかでないが、ともかくも此處において彼は王のために「ロージャー王の地圖」(Tabula Rogerina)を製作し、その解説書「ロージャー王の書」(Libro del Re Ruggero)を著述した。この大地圖と稱せられるものは一八一四年に完成したが、有名なる「イド・リシーの小地圖」はその作製年度を明らかにされず、彼の歿した後、一八五二年に至つて初めて公表されたとしてゐる。

元來、アラビア地圖の發達は三期に分たれる。

(1) 西紀八・九世紀時代。(この時代は專らプトレマイオスの模倣祖述に努む。)

(2) 西紀十世紀以後(アラビア人の航海術の伸張と共に地圖も亦獨自の發達を遂げる。)

(3) ノルマン・アラビア期(アラビア地圖としては、こゝに空前の成果を收め、イド・リシーの地圖は之を代表するものである。)

右、ノルマン・アラビア期と敢て稱するわけは、ノルマン王ロージャー二世のパレルモの宮廷において、アラビア人が持つてゐる地理知識を、イド・リシーによつて結集されたからである。

當時の回教地理學者は大西洋に關する知識を持ち合せてゐないが、回教徒の支配下にあつた地中海、紅海、印度洋、支那海については相當に進んだ實際的知識を持つてゐたとなすべきであらう。既に九世紀に、イブン・コルダードビフは揚子江及び黃河の河口について書いてをり、イブン・ハウカルは、日本(倭國)朝鮮(新羅)のことを書いてゐる。而して西紀十世紀に到ると、マス・ウーディが、セイロン、マライ半島、東印度諸島について記するところあり、回教徒の長年にわたる廣域航海の實際知識が集積に集積を重ね、遂に彼の治世に、その保護下に、イド・リシーの不朽の製圖となるわけである。

もとより、彼の地圖とても現在のものに比較すれば多くの缺點を擧げ得らるゝが、

同時代、乃至は更にこれより下つた時代においても、ヨーロッパ人の地圖は遠く之に及ばない點に、回教地圖としての大いなる誇りがある。

口繪寫眞にも明らかな通り何等投影法を施さず、強いて嵌め込まんとした程度であり、然も各地の地理的知識に至つては甚だ不正確である。これ等の點を指摘して、單に手記を圖表にしたものに過ぎないと云はれる向きもあるが、地中海に關する知識は流石に克明であり、バグダードとトレードとの間は、緯度にあつて僅かに三度の誤差があるのみと云はれてゐる點に鑑みれば、一概に侮るわけもないであらう。

當時における實用地圖といふことを前提にすれば、イド・リシーの業蹟は決して沒せられるところではない。

II

ロージャー二世はシチリアより對岸アフリカを征服せんと一度ならず企てたが、然も徒らに回教徒を激昂せしむることを虞れて、これが決行を控へたと云はれてゐる。即ち、彼の主要目標はアフリカになく東ロマ征服にあつたと傳へられ、從つてこの大目的遂行のために力めて回教徒を味方にしておき、彼等の殘餘の海上勢力を利用せんとする計略のあつたことが窺へる。

當時、シチリアは各民族、文化、言語の集合場所と云はれ、事實、ロージャー二世は之等をよく綜合し按配して、適材を適所に活動せしめたのである。彼の水師提督にシリア出身のギリシヤ人もあつたが、同時にアラビア人のあつたことも指摘される。

されば、西部地中海及びシチリアがノルマンの治下にあつたと雖も、必ずしも回教徒の海上勢力が根柢より覆滅されたとは考へられない。唯、政治的に觀て、イスパニア、北阿の回教徒の實力が次第に傾いて來たことは被はれない事實であり、自然に海上雄飛の餘裕を持たなくなつたのである。

第三章　オスマン・トルコの盛衰

I

コンスタンティノーブルは回教徒にとつて宿怨の府であるが、之が二一一三年オスマン・トルコのメフメット二世によつて攻略せられ、こゝに初めて回教徒の手に歸したのである。

オスマン・トルコは之を機として一大興隆をなすに至るが、この時代には他の回教圏諸國が既に衰微し、地中海の實權をキリスト教徒に委ねた結果、殆ど四分五裂の狀態に立ち到つてゐたので、新興トルコが回教圏の再統一を目ざし、而してその再興を圖るに希望を持つたことは當然である。

さればメフメット二世は鋭意海軍を充實し、地中海の制海權の奪回を志した。

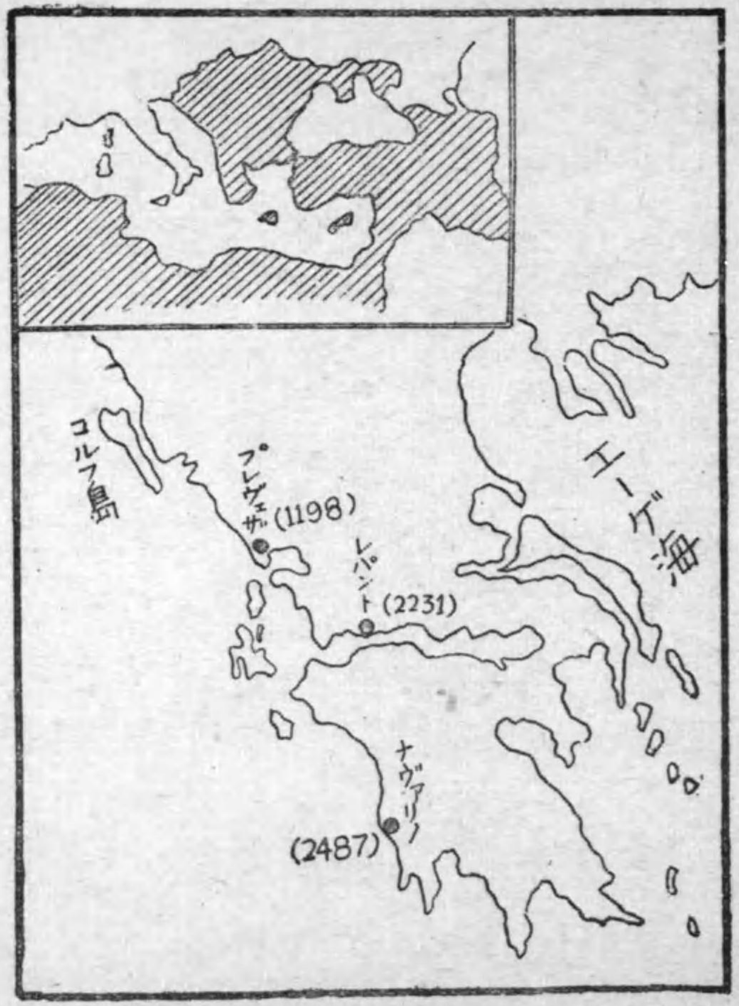
初めトルコの海軍の試みたのはヴェニスの通商を破壞するに止つてゐたが、やがて強力なる海軍を持つに及んで、先づエーゲ海及びギリシヤ各地におけるヴェニスの勢力を一掃した。かくの如く、緒戰より戰局は有利に展開してゐたが、之に加へて、當時のフランスがイスパニアに對する必要からトルコと結ぶに至つて、愈々有利な攻勢的立場を持ち、海陸共にヨーロッパ諸國の心膽を寒からしめた。特に二一四〇年の南イタリア、オトラントの侵寇の如きは、全ヨーロッパをして震撼せしめたと云はれるほどである。實にトルコ帝の意圖はイタリアを攻略してロマを西の首都たらしめるにあつたと傳へられてゐる。

メフメット二世は二一四一年、事半ばにして歿したが、スライマン一世（二一八〇年—二二二六年）の治世においてトルコの海上勢力はその極に達し、着々と地中海制覇に成功した。二一八二年ロードを奪取して聖ヨハネ武士國をしてマルタ島に走らしめ、コンスタンティノーブル陷落一〇〇年記念後にはシリアよりエジプトに伸び、カイル・アッディンの指揮下に西部地中海の攻略も進展し、更に二一九八年

には、イスパニア、ヴェニス、ロマ法皇下のキリスト教徒等のアンドレア・ドリアの率ゐる聯合艦隊一六七隻を、トルコ艦隊一三〇隻を以てイオニア海のプレヴェサに邀撃して大勝利を收め、遂に地中海制覇の宿望を達した。

當時のトルコ海軍は多士濟々であつた。

キリスト教徒を兩親に有するトルグドは小アジアのメンテシャ出身、海上勤務の兵士となり、一時ゼノアの軍務に服したこともあつたが、やがて海賊となり、地中海の風波ために高しとの感を與へた。彼の根據地はテゥニジアのスサの南十七里程のマフディアであつたが、二二一〇年九月、彼のイスパニア海岸劫掠の不在に乘じ、チャールス五世に送られたイスパニア艦隊のために破壞された。偶々彼がヴェニスの船隊に加へた海賊行爲を責めるためトルコ帝は彼を召喚してゐたが、之を無視してモロッコに赴き帝の威勢を輕んじた。さりながら、スライマンはマルタに對する彼の援助を得んために彼を許すばかりでなく、更にトリポリの司令官たらしめた。かくて彼はコルシカにも向ひ、二二一三年八月にはバスティアを奪ひ、コンスタン



第一三圖　トルコ海軍海戰要圖並にその最大版圖

ノーブルに凱旋すると、スライマン帝は彼を嘉賞してアルバニアの經營に當らしめた後、トリポリの總督に任じた。二二二五年マルタ島を死守するラ・ヴァレットを討つて成らず戰死するに至つたが、その最後までトリポリの經營に當つた。

小アジアのキリスト教徒として生れたサリ・レイスも亦同じく海賊として發足したが、やがてテゥニスの攻略に殊勳を樹て、アルジールの支配者としてハッサン・バルバロッサの後繼者となつた。

其の他にも名將多く、ためにトルコの海上勢力は、アラビアからペルシャ灣に進み、更に印度洋に伸びた。またバヂャレット二世の海將カミル・レイスの甥にあたるピリ・レイスは、エーゲ海及び地中海に雄飛した。殊にペルシャ灣に航してマスカットを征服しオルムズを攻擊したが、ポルトガル艦隊に迫られて退却し、その一部は難破の悲運に見舞はれた。彼自身も歸途エジプトのカイロにて捕へられてゐる彼の編纂になる海圖（バフリジェ）は、エーゲ海及び地中海等、彼の遍歷した海域の潮流、海峽、上陸地點、島嶼、港灣等を詳細に示したものである。

又、シディ・アリーはペルシャ灣にてポルトガル人に追はれて印度に上陸し、陸路三年を費してペルティスタン——ペルシャを經て歸國し、後、印度洋航路の體驗に基いて「大洋」（ムヒット）といふ書を著してゐる。

かくの如く人材に惠まれたトルコ海軍の陣容は、キリスト教國側にとつて、かねてより一大脅威であつた。初めトルコ海軍がヴェニスの船舶をエーゲ海方面より一掃せんとした頃より、法皇アネアス・シルビゥスはトルコへの恐怖を抱き、若しヴェニスにして全面的に敗退することがあれば地中海のキリスト教國が危殆に瀕するとなし、專ら、ヴェニス・イスパニア海軍力の聯合を慫慂してゐた。然も今や彼の杞憂は現實の問題となつた。プレヴェサの海戰はキリスト教國側の全面的敗北である。こゝにおいて法皇ピウス五世は二二三一年五月二十五日、ヴェニス、イスパニアを誘うてトルコに對する神聖同盟を結んだ。

この同盟の經費の負擔は、イスパニアが半額、ヴェニスが三分の一、法皇が六分

の一となつてゐた。これによつて見るも、中心勢力はイスバニアであつた。イスバニア側の水師提督はドン・ファーンの外にジョオヴァンニ・アンドレア・ドリアであり、ヴェニス側はヴェニエロ、ロマ法皇側はコロンナであつた。而して三者の陣容を窺ふに

イスバニア　ガレー九〇隻、他に大小の帆船を混じて七四隻
ヴェニス　ガレー一〇六隻、他に大型艦も含めて十數隻
法　皇　ガレー十二隻、其の他數隻
であつた。

既に二二三一年九月十六日、聯合艦隊はメッシナを出て索敵に向つたが、偶々トルコ艦隊がアドリア海方面にあるとの情報を得、直ちに攻勢に出んとした。而して九月二十六日、コルフに至つてトルコの大艦隊がレバントにあるを知つた。

こゝに兩軍の勢力を見るに、

聯合國　三〇〇隻、兵員　八萬。司令官　ドン・ファン・ドーストリア
トルコ　三〇〇餘隻、兵員　十二萬。司令官　ピリア

さて、兩軍は十月七日いよいよ戈を交へたが、この海戰は漕手の技術に俟つ最終の海戰であつた點に海戰史上注目に値するのである。

トルコ側の旗艦はクルアーンの章句を記した旗印をかゝげ、聯合艦隊も亦法皇祝福の旗幟を示した。

トルコ側は右翼にシロッコ、中央にピアリ・ハシア、左翼にアルジェリアのアルチ・アリーを配してコリント灣の出口に横陣を張つた。之に對する攻擊者聯合艦隊は、右翼にアンドレア・ドリア、中央にヴェニエロ、ドン・ファン・ドーストリア、コロンナ、左翼にヴェニスのバルベリコを配し、更にサンタ・クルズ侯の率ゐる豫備をおいて同じく横陣を布置した。

既に述べたる如く兩軍の艦數は略〻等しいのであるが、ヴェニスの大型艦の中にあるガリースは櫂を三〇乃至五〇有し、一本の櫂に五人以上八人の漕手を配し、二

三百人の水夫が乘つてゐた。檣は三本で頓數は六〇〇乃至一〇〇〇であるが速力遲く操縱困難を缺點となしたが、前後に强力なる砲塔を備へ、舷側にも亦、櫂の間に備砲を有して、優にガレー五隻に對抗し得るといはれる特色をもつて活動した。

さて、兩軍は一二三一年十月七日正午すこし以前に開戰となり、トルコ側先づ攻勢に出たが、ヴェニスのガリースが少し前進の形に配されてをつて、その砲擊に對するには一騎打ちの不利を悟るや展開直進、敵の本陣を包圍せんと計つた。

トルコの左翼を率ゐるシロッコは、この方面の水域に精通してゐたのでヴェニス艦隊を壓迫し、一時敵の混亂に乘じて八隻を擊沈したが、ヴェニスのバルベリコよく奮戰し、眼を射られながらも士氣衰へなかつた。

トルコの右翼のアルチ・アリーは、アンドレア・ドリアの艦隊に突進し、敵をして艦列を右に展開せしめて、之に乘じて數隻を沈沒或は捕獲した。イスバニアの司令長官はこの危機を救はんとしたが失敗した。

中央にあつては旗艦同士の一騎打ちの血鬪をなし、双方共に矢または鐵砲に依つて爭つたが、イスバニアの射擊が正確で、次第にトルコ側の旗色が惡くなり、この結果、兩軍共に旗艦を救けんとして混戰狀態に陷つた。

かくするうちに、ヴェニス艦隊は指揮者が重傷を負へるに屈せずして遂にシロッコの旗艦を沈め、その首級を擧げるに至つたゝめ、トルコ軍は忽ち士氣沮喪して逃走を企てるもの續出し、中央ではサンタ・クルスの率ゐる豫備隊が救援したゝめビアリ・バシヤは銃火に斃れ、その旗艦も亦捕獲されることゝなつて、勝敗の決が次第に明らかになつた。しかしドン・ファン・ドーストリアさへ、足に負傷するほどの接戰をなしてゐる。

また終始よく苦戰に堪へてゐたアンドレ・ドリアが豫備隊の援助を受けることゝなるや、アルチ・アリーも遂に抗し得ず、その快速を利用して逃走した。

この海戰において、聯合艦隊は約八千人が斃れ、トルコ側はこれに三倍し、捕囚となつた者凡そ五千人、逃げ出した艦は四十隻、敵に委ねたもの百三十隻に及んだといはれる。

トルコはかくて一敗地に塗れた。思ふにトルコの戰術が劣つてゐた譯ではないが、艦船の運用において聯合國が勝り、司令官の負傷如何にかゝはらず士氣衰へざりし點に聯合國に勝因あり、且、優秀なる新鋭武器と豫備艦隊の活動とによつて、聯合國は完全なる勝因を握り、遂にトルコ艦隊を覆滅するに至つたのである。

これをレバントの海戰と呼ぶ。この結果、イスパニアの海上勢力が急激に增大するに至つた。

Ⅱ

レバントの海戰の敗北はトルコに致命的打擊となり、東部地中海の既得權も喪失せんとするに至つて、新興トルコの折角の雄圖も一朝にして水泡に歸した。

元來トルコ族はアラビア族と異つて、遊牧に終始せる生活より興起して民族的運命を開拓したものであり、アラビア族の如く、海上活動に事前の經驗も乏しく、その適切なる訓練も十分に受けてゐなかつた。然もトルコ海軍は、その創建時代にあつては海賊を懷柔して用ゐたり、他國の海軍を味方に加へる程度であつたがゆゑに、勝味のある戰にはその結束を維持できたが、一旦敗戰になると忽ち總崩れとなる脆弱さを持つてゐたのは洵に遺憾であつた。且又、武力を唯一の頼みとするものゝ常として征服後の所謂、戰後經營に細心の注意に缺けるところがあつた。彼等は、勝利の結果を如何にして保持すべきかに意を用ゐること少く、その得たるものを利用するに夢中になり、やがて之を失ふに至つたのである。斯くしてトルコは黑海とエーゲ海とに於ける通商に僅かに昔時の勢力を維持し得たのであるが、しかもオリエント交易の利を求めて止まないイタリー諸市及びその他の西歐諸國の海上勢力は、この海域にまでも容赦なく迫つて來たことは云ふ迄もなく次第に蠶食されて行つた。

回教徒の海上活躍に最後の華を飾らんとしたオスマン・トルコもかくて衰頽した。今や、地中海は既に回教徒の海に非ず、漸く、紅海と印度洋並びに支那海方面に餘喘を保つのみであるが、然も之も亦、イスパニア、ポルトガル等の新航路發見の結果侵害せらるゝに至るのである。

第四章　印度洋への新航路の發見

I

十字軍は前後二〇〇年に亙る爭亂であつた。然もその結果において初期の目的を達成するには至らなかつたとしても、東西交渉の結果、ヨーロッパ諸國にオリエントへの眼を開かしめたことは確かである。從つてヨーロッパ諸國がオリエントへの關心を持ち、殊に經濟的進出を企圖したことも領かれるが、その際にオスマン・トルコの興起となつて要衝コンスタンティノープルが遂に掌握せられ、オリエントへの途は甚だ狹き門となるに至つたので、この事情が來るべき新航路の開拓、新陸地の發見を誘導する原因となつた。

さて、イスパニア及びポルトガルの海外發展についてはロマ法皇も之を承認し、二一五四年、法皇アレキサンダーは、マゾレス群島の西一〇〇リーグの子午線を以て兩國海上における境界線となし、東をポルトガル、西をイスパニアの活動範圍と設定した。その後この境界線は二七〇リーグ西に移動されるが、所謂「閉された海」として兩國に特殊の權益が與へられたわけである。

二一五四年と云へば、コロンブスの新大陸發見(註)より二年後であり、ヴァスコ・ダ・ガマの印度への新航路開拓に先立つこと四年である。

ヴァスコ・ダ・ガマは見失はれた船を探査するといふ理由の下に水先案内を傭ひ、遂にカリカットに到着したのである。回教徒は勿論これを歡迎しなかつた。秘かにカリカット附近の酋長と結んでポルトガル人の活動を妨げ、遂には捕へて監禁するに到つた。然しポルトガル人はよくこの窮地を脱し、二一五八年にカリカットを逃れて翌年九月リスボンに歸つた。かく苦杯を嘗めたが、彼等は印度より直接に商品

（註）コロンブスの新大陸發見の年には、イベリア半島における回教徒の最終の據點たるグラナダが陷落し、その西歐における政治的勢力は根柢より覆滅してゐることを注意すべきである。

をもたらした外に、ベンガル、スマトラ、マラッカ等の事情を傳へ得た。

かくてヨーロッパ人にとつて對印航路に新しい時代が來たわけである。彼等は回教徒がイタリー諸市を主とするキリスト教徒と狹隘なる地中海にひしめき、この爭奪に血眼になつてゐる間に、悠々と大西洋から南阿を經て印度に達したのである。

この結果、二一六四年にはリスボンにおける胡椒の價格が暴落して約半ばになつたほどであるが、然もそれでゐて尙、八割五分の利益があつたといふ。確かに巨船による大量輸送の結果である。

この頃以降、ポルトガルの印度方面の經營が着々効果を擧げ、アルメイダ（二一六四年―二一六九年在職）は印度の西岸にカナノル等の數個の港市を建て、いよいよ回教徒の東方通商に大なる打擊を與へた。彼は常に和戰兩樣の構へを以てし、土酋を巧みに懷柔して回教徒の地盤を動搖せしめた上、武力を以て威嚇し、その目的を達した場合が少くなかつた。

二一七〇年にはアルブケルケ（二一六九年―二一七五年在職）の辣腕が表れて、ゴアを奪ひ、將來の活動の重要據點を收めた。

次いでポルトガル人は、その翌年にセイロン島及びマラッカを占據し、二一七五年にはホルムズを奪うて、この地の回教徒を驅逐した。

かくして二一七六年に初めて廣東に着し、更にその翌年には明の朝廷に使節が達してゐる。恰も武宗の正德一二年に當る。

當時ヴェニスにあつては自から大西洋に出ることが出來ず、然もポルトガルの印度貿易の利益を目しては坐視するに堪へず、歐洲向けの胡椒の販賣を一手に引き受け度しと申し出てゐるが、もとより之はポルトガルの許すことではなかつた。そこでヴェニスは再度の使者を派遣し、ポルトガルの資本金では大規模の貿易は困難であらうから金を貸さうと云うてゐるが、これも亦拒絕された。ヴェニスの焦慮とポルトガルの得意を見るべき光景である。

ポルトガルの意氣は、正に天を冲すと云ふべきであらう。

彼は長期の航海に堪へ得るやうに大船を備へた。そのために商品の積載量も莫大

であつた。然も彼は優秀な武器を備へて外敵に當つた。之に對して回教徒の船は小型であつた。支那のジャンクに對して之は「ダウ」と呼ばれる。ジャンクと同樣にその語源は明らかでない。一本或は二本の帆柱を有し、三角形の帆を揚げて走る。大船にして漸く一五〇噸から二〇〇噸積みであり、船材はチークを用ゐ、その船材の硬質なるがゆゑに釘を使用してゐなかつたから砲擊を受けると堪へられなかつた。

かゝる狀態であつて、既に兩者の雌雄は明らかである。積載量において回教船は也早や對抗できなかつた。從つて齎す商品の價格にも彼は敗れた。貿易の利を失ふに至つたのは蓋し當然である。

II

ポルトガルは新航路の開拓によつて東印方面に香料の原產地を發見するが、之に續いて東方より廻り來つたイスパニアが割り込むことゝなる。マゼランはこの結果、世界周航を完成したが、然も彼の水先案內を勤めた者は、回教徒のイブン・マジードであつた。嘗ては南支那海及び南太平洋の水域は回教徒の獨壇場であつたが、今や既にポルトガル來りイスパニヤ來り、やがて之につゞいてオランダ、イギリス、フランスが登場する。而して回教徒は遂に彼等の科學に壓倒され、世界的海上活躍より退場するの止むなき一路を辿るに到つた。

回教徒は之に報いるに、僅かに重い關稅を以てしたが、之は謂はゞ消極策にすぎなかつた上、却つてヨーロッパ人の乘ずるところとなり、印度各地の貿易さへ脅かされるに至つたことは、自繩自縛の嫌ひがないではなかつた。

以上、印度洋への新航路において、ポルトガル人の活躍を主として、回教徒を驅逐する立場より見た。イスパニア以後、この方面に現れた西歐人とポルトガル人との交渉、反撥は本書の取り扱ふ範圍外でもあり、また歐洲的立場で書かれた史書の中に多く取り扱はれてゐるから、今は觸れないことにする。

第五章　その後のトルコ

I

曩に述べたやうにレバントの海戰は、トルコの制海權を覆滅せしめた。しかし、トルコの國勢がこれによつて根柢から破壞されたと見るべきではない。

二二三二年、即ち、レバントの海戰の翌年六月には、二百五十隻よりなる新艦隊が成り、執拗なるキリスト教國の攻勢に抗せねばならなかつた。しかも、トルコは當時有能なる水師提督が得られず、その上、海戰における常勝の信念が既に失はれたのであらうか、局部的に勝利を收め得ても大局を如何ともなし難かつた。

この際におけるイスパニアの態度は、徹底的にトルコの海上勢力を潰滅せんと計つたものゝ如く、ヴェニス、フランス等とは離れて單獨に大いにトルコと抗爭した。

二二三二年トルコ軍はアウストリアのドン・ファーンが占領してゐたテウニスを二年後に奪還し、これを基地としてシナン・パシア及びキリジ・アリーがシチリアに向けて攻勢に出ようと企てたのに對して極力これを制したのは、その表れの一つと云へる。

しかもセリム二世歿した後はトルコの海上勢力は次第に衰へて、消極的、防備的艦隊の存在が認められる程度になり、陸軍も種々なる國内的政治事情に禍ひされて昔時の活躍を見られなくなつた。

南下の政策をとり暖き海を求めて止まないロシアが、黑海方面にその領土を擴張し、二四二九年の春、急遽トルコを攻擊し、クリミア、カバルディア等を占據せんとした。尤もペッサラビアのコーティン陷落までトルコは敵を喰ひ止め得たが、九月これが失はれるに至つてロシア軍は潮の如く侵入し、翌年の五月にはキオス島の對岸なるチェスメの沖合にてトルコ艦隊を擊破し、更にロシアの戰艦はダルダネルス海峽通過を敢行せんと脅かしてゐる。

かゝる戰果が、やがて二四三四年のクチュック・カイナルヂ條約となり、トルコが、その國勢の疲弊を暴露することになつた。

この條約はロシアをして黑海並びに地中海におけるトルコの水域にて自由に交易通商權を認めたもので、ロシアの勢力が著しく增加するとゝもに、愈々トルコの海軍力が衰へたるを示すものである。

しかも殘念ながら、當時のイスラーム諸國中海上勢力を有するものは、トルコ以外に擧げられない有樣であり、その代表者とも看做されるトルコがこの衰運を辿つてゐることは、回教海事史上、誠になげかはしいと云はなければならぬ。

國際關係の親善の必ずしも賴みとなし得ないことは常に云はれるところであり、ロシアの南下に對しても、これを制御せんとするヨーロッパの列强が存して、トルコのために計る列强がないとは云へないが、これらは素より自國本位の行動を取ることも止むない次第である。

二四八七年七月六日英佛露三國の使節ロンドンに會して、ギリシャのために計りて條約を結び、これをトルコに承認せしめようとした。しかしトルコ政府はこれを拒絕した。

ナヴァリノ灣內にあるトルコ・エジプトの艦隊が行動を開始せんとするを、英國地中海艦隊の水師提督コドリントンが之を知つて、九月十九日トルコの提督タヒル・バシアにギリシャに對する敵性行爲を取らないことを通達した。やがて小アジア方面に航行中のフランスのドゥ・リグニー少將の率ゐる艦隊も合同したので、同月廿二日に共同聲明をトルコの使節イブラヒームに發し、その三日後會見をなして居る。當時、英佛兩艦隊共に軍需品に不足を告げてゐたので、口約を以てトルコのギリシャに對する敵性行爲をなさないことを確めて、英艦隊はザンテに、佛艦隊はセルヴィに赴いた。尤も若干の監視艦を殘して、トルコ海軍の動靜を注意したのは云ふ迄もない。

英艦隊はトルコ艦隊が出動したとの報に接する以前、既に錨を捲き上げ、愈々敵を擊碎せんとの行動に出ようとしてゐた。尤も、早くもギリシャの海上勢力を率ゐ

て居た英人フランク・ヘースティングス大佐は、コリント灣の北岸のサロナ灣で九月二十九日トルコ艦を攻略してゐた。

かくて十月三日より五日に至る間にコドリントンは旗艦「アジア」と數隻を率ゐてナヴァリノ沖に戻り來り、十三日には佛艦隊の他ロシヤのヘイドン少將麾下のロシア艦隊も參加し、擧げてコドリントンの指揮に從ふことゝなつた。

これに對して、トルコ・エジプトの艦隊は決して優秀なる艦隊とは云へなかつた。殊にフランスの旗艦「シレヌ」の如きは特にすぐれた性能を持つてゐた。そこでトルコの司令官イブラヒームは、陸上の行動によつて敵を牽制しようと計り、ギリシヤの村落に火をかけて氣勢を示した。これは明らかに英佛露の聯合艦隊より望むことが出來た。

そこで聯合艦隊は二列となつて進み、イブラヒームの艦隊に接して投錨し、ダーマス號より使者をトルコ側に送ることにしたが、この端艇が砲擊されたので、茲に應戰することになり、優れたる砲術の前には終にトルコ艦隊の四分の三は擊破され、或は自爆することゝなつた。

聯合艦隊の人的損傷は左の通り報告されてゐる。

	戰死	負傷
英	七五名	一九七名
佛	四三名	一八三名
露	五九名	一三九名

これに對して、トルコの側は遂に確かな數を發表しなかつたが、夥しいものと想像される。

これが十月二十日に行はれたナヴァリノの海戰であるが、この結果トルコの國際的地位は失墜し、ギリシヤの獨立運動を制壓する望みも亦全く失ふに至つたのである。しかもロシアの南下を望む結果おこる數次の露土戰爭と、二四九一年より二四九三年卽ち天保二年より同四年に及ぶメヘメット・アリ!の亂とは、衰微の裡にトルコ海軍を導いた。

二五一三年（嘉永六年）十一月三十日に、ボスフォロスよりバッツムに向つたトルコ艦隊が黑海南岸シノープにてロシア艦隊に攻撃され全滅したことがある。この場合、トルコの將兵が必ずしも勇敢でなかつたとは云へないが、既に艦艇の裝備について、その差は如何ともなし難いものがあつたと云はなければならない。

これがやがて、その翌年三月、英佛共同してロシアに宣戰し、玆に二五一六年に及ぶクリミヤ戰爭が始ることになつたのである。

更に二五二九年卽ち明治二年十月、スエズ運河の開通は回教圈の海上勢力に致命的の打擊を與へた。卽ち、スエズ運河は地中海と紅海とを結ぶ結果、アラビアを含む西アジアと北阿とを二分し、回教圈の中樞がこゝに兩斷せられるのである。それ ばかりではない。この結果は印度洋にヨーロッパ人の海の大道が開けられたことになるのである。嘗てエジプト攻略成るの日に、ナイルと紅海とを結ぶ運河を改修して利用せんとしたが、アラビアの支配者達は之を中止した。理由は敵海軍に乘ぜらるゝからであるとしたが、想へば、その當時にあつても、この水路の存在は回教圈を中斷する强固なる分劃線の成立を意味したのである。回教徒は自からの便を犧牲にしてまでも放棄した水路を、今や敵に開かれるに至つたのである。

かくて、回教徒は地中海を失ひ、紅海を失ひ、印度洋を失ひ、支那海を失ひ、彼等が生命を賭して得たるものは全て失つた。

要するに回教徒の海上勢力の失墜の直接理由は、

一、ヴェニスの擡頭による東部地中海制海權の喪失
一、ノルマン南下による西部地中海制海權の喪失
一、イスパニア、ポルトガルによる新航路の發見
一、スエズ開通によるヨーロッパ諸國船の東方進出

等を擧げてよいであらう。

さはいへトルコは永く回教徒にとりては宗主國の如く考へられ、ケマル・パシアによりて二五八四年（大正十三年）に最後のカリフが廢止されるまで、トルコ帝セリム一世が二一七七年に始めてから、歴代のトルコ帝がカリフを稱して宗教的にも元首として振舞つて來たゞけに、回教徒として海軍を復興せんとする意志は決して失はれたのではなかつた。

二五五〇年、明治二十三年に於けるエルトグルル號によるオスマン・パシヤの日本派遣は確かにその一つの表れであるが、これは後述に讓ることにしたい。

回教諸國の海軍は今なほ決して優勢とは云へない。二五九六年、即ち昭和十一年末現在は次の通りである。（「回教圏」一の四の八三頁による。）

トルコは云ふ迄もなく、ケマル・パシアの經營によるとはいへ、未だ昔時の盛況と比較すべくもない。

戰闘巡洋艦　二　巡洋艦　二　驅逐艦　九　潜水艦　五

總噸數　五三、七二〇

兵員數

將校　一二〇〇人　下士官　一、〇〇〇人

兵卒　七、〇〇〇人　計　九、二〇〇人

尚、イランには、巡視艦　若干、砲艦　八、將校　二四人、兵卒　八四五、計　八六九人

エジプト　巡視艦　四、護送艦　一

補遺篇

第一章　アラビア語と海事

回教徒の海上活躍の名殘りを物語るため、亞語（以下アラビア語の省略形）が如何に現代海事關係の言語に存在してゐるかを考察してみたい。これに當つて注意すべきは、言語の由來する經路を見謬らないことである。例へば、砂糖は事實アラビア人によつて西歐に傳へられたものであり、從つてこの關係から言語もアラビア語に由來するものと考へられ易いが、實はさうではない。砂糖は亞語では sakkar であるが、西語（以下イスパニア語の省略形）では azucar で、亞語の冠詞 al の名殘りを示してをり、佛語では sucre となる。さりながらこの言葉は本來、梵語の çarkara よりペルシヤ語の sakar を經て來つたもので、亞語はその中繼を勤めてゐるに過ぎない。

こゝでは、この種の中繼語は省略し、本來、亞語によるものゝみを擧げることゝする。

第一に擧げねばならないことは、海軍大將、又は水師提督を意味する Admiral が亞語から來てゐることであらう。本來の態は Amir（指揮者）al（何々の）bahr（海）――であつて、卽ち海の指揮者のことである。この結成語は初めシチリアを支配したアラビア人が成したと云はれるが、キリスト教徒の指揮者が用ゐた際には Admiralius Maris とし、ゼノア、フランス、イギリスが之を用ゐた。イギリスでは一般に、Amyrel of the Sea 又は Admyrall of the navy として使はれ、トルコ帝が Admiralius mundi（世界の海上指揮者）と氣取つて自からを呼んだ場合もある。何れにもせよ、この言葉がヨーロッパの諸國語に採り入れられるに至つたことを考へれば、當時の回教徒の海上勢力が如何に强盛であつたかゞ窺はれる筈である。

次に Magazine 貯藏所であるが、これは本來海岸に設けられたもので、亞語では Mabzan であり、之が複數になつて Mabâzin となり、伊語の Magazzino より英

語に傳へられたものであらう。西語では Magacen 或は Almagacen である。（因みに、亞語源は「堆積する」の謂）

次に Arsenal がある。これは造兵廠などと譯されるが、寧ろ、海軍兵器庫乃至は船渠となすべきである。亞語では Tarshâna であつて、船舶の艤裝並びに進んで武備をなすに必要なる一切の物資を用意したる場所を指してゐる。回教徒の有名なる歴史家、イブン・カルドゥーンが、アブド・ゥル・マリークの命によつてチュニスに之が設置されたと記述してゐるのは、全くこの内容を有するものである。西語では冠詞を採り、然も發音の規則による同化を以て Atarazana で示してゐるのは、イスパニアの史家ドシーが指示してゐる通りであり、伊語で Darsena は船渠を意味してゐる。されば、この言葉は本來、海事に關係するものと見るべきである。

又現時　地中海で用ゐられてゐる一種の小型船に、英語で Felucca と呼ばれるものがある。之は西語でも同一の綴りであり、伊語では Feluca 獨語では Feluke であるが、亞語では Fulk とて船を意味するもので、最初にイタリアに傳つたとされてゐる。

次に、季節風 Monsoon は、本來、亞語の「印をつける」Wasama から生じた。之が Mawsim「時」「季節」を示す言葉となり、馬來語に入つて Mûsim「季節」となり awal musim が「季節の始め」と共に「季節風期に入る」ことを示すに至つたのが、ヨーロッパ人によつて轉訛したのである。即ちポルトガル語の monçao 西語の monzon 佛語の monsson、伊語の monsone となつた譯である。

風については、この外にイタリアで東南風で sirocca と稱せられるのがある。亞語で ˇsaraqa は「太陽の登る」の謂であり、ˇsurûq はその名詞である。即ち「東」を意味してをり、サラセン saracen も亦東方民族の謂と解して ˇsarqi「東方」よ

り說かんとする說もあるが、これは他に「沙漠」の謂より解せんとする向きもあつて、容易に定め難い。然し sirocca の場合はこの種の問題がなく、航海者の注意するところである。

最後に、航海者の天體觀測に當つて用ゐる

天頂　zenith
天底　nadir
方位　azimuth

は何れも亞語に由來する。卽ち

zenith は samt
nadir は nazir
azimuth は assamût

である。而してその意義は

samt —「道」又は「目標」
nazir —「相對するもの」
assamût —「道」又は「目標」（複數にて冠詞を採る。）

之等の場は、その中間に西語が仲介してゐると見てよい。

以上の如く亞語に由來する海事關係の言葉を見ても、回教徒の往昔の盛んな活躍がしのばれやうではないか。筆者の研究は不幸にして、未だこの程度の發表に止つてゐるが、更に研究を進めてみれば、意外の發見があるかも知れない、

第二章　七つの海

「七つの海」とは世界海洋の代名詞とされた。之をかくあらしめたのは英國である。英國は彼の世界的海洋支配を誇稱して「七つの海にユニオン・ヂャックは飜る」と云つた。そして世界的歐化謀略の表に立つて、「七つの海」なる言葉が如何に世界を魅倒し、之に君臨する英國を仰慕せしめたことであつたか。さりながら、皇紀二六〇三年の今日にあつては、「七つの海」から英國旗が退却した。今はこの意での「七つの海」の問題を割愛し、本論に入りたい。

凡そ「七つの海」なる言葉は、本來、如何なる海を指したのであらうか。

イタリアにも「七つの海」(Septem Mavia)の語がある。これは、ポー河のアドリア海に落ちる個所に生ずる「潟」を、ラヴェンナよりアルティヌスまで七つを數へて呼んだと云はれるが、これは今われわれが取り上げて問題とするには餘りに小規模である。

クルアーンの中にも、「七つの海」なる言葉が存在してゐる(三〇—一二六)。海洋の民としての回教徒が擧げた「七つの海」とは何處何處であつたか。これはまことに興味深い問題であるが、われわれは之を彼等の用ゐた地圖によつて求めるのが最も適當であると信ずる。そして、アラビア地圖の代表的存在と云ふべきイド・リシーの小地圖に據ることゝしたい。

(1) 支那と印度との海　これは大體、現在の印度洋、大東亞海、南支那海等が含まれる。

(2) 綠海　紅海に對する綠海であつて、これは現在のペルシャ灣である。

(3) クルスム海　これは現在の紅海に當る。

(4) シリア海　これは「シャムの海」又は「ロマの海」と呼ばれるが、現在の地中海である。

(5) ポントス海 (Pontos) これは今日の黒海である。
(6) ヴェニス海　これは卽ちマドリア海である。
(7) ジョルジャン (Gorgan) 及びディレムの海 (Dilem) これはカスピ海に當る。

以上、回教徒によつて「七つの海」と呼ばれるのは、彼等の活躍舞臺の海域を表示するものであることは勿論である。然も「海の子」彼等にして遂に進出しなかつた大西洋については、之を「不明の海」(Bahr al Muhit) と呼んでゐることは興味深いことである。

いづれにしても「七つの海」は、海洋制覇民族の誇らしき言葉であつて、彼等も亦、その實力において之を稱へたものであらうか。彼等にして「七つの海」とは呼ぶものゝ、この「七つの海」とても、本來においては、印度洋と地中海とが基礎であつて、印度洋にはペルシャ灣と紅海とを加へ、地中海に黒海とアドリア海とを附加し、更に內陸のカスピ海が枚擧されたものであつた。

イド・リシーの地圖については既に觸れたところであるが、「七つの海」に關聯して尙若干の附言を試みたい。

イド・リシーの地圖にあつては、挿圖によつても知らるゝ通り南が上になり、北が下になつてゐる。

初めヨーロッパの世界地圖にあつては、東が上になつてゐたが、西紀十一世紀から十二世紀に至り彼等の航海範圍が廣くなるにつれて、その航海目標を北極星にとつたゆゑに、やがて北が上部に書き直されることゝなる。

回教徒にあつては、印度洋がその最大の活躍舞臺であつたことから、南十字星を目標としたので、南を上になしたとも考へられる。然しながら之は尙考慮の餘地があり、必ずしもかく定めるわけにはまゐらない。

亞語における東西南北の呼稱は、

東　シャルク　Sharq
西　ガルブ　Garb